

遺物は、住居南側のカマド周辺からややまとまって出土した。

識別個体数は49個体、土師器は甕9個体、台付甕1個体、須恵器は環26個体、椀4個体、蓋9個体である。

1～5の環底部の調整は、1が糸きり後、周辺をへう削りしており、2～5は、糸きり後未調整である。

口縁径に対する底部径は、1/2ないしそれよりやや大きくなる傾向にある。

第16表 第7号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
89図-1	環	(12.0)	3.6	(6.0)	WG礫	A	にふい黄橙	20	SJ6の破片と接合 周辺回転へう削り
-2	環	11	3.6	7.0	WG礫	B	青灰	100	外面に赤色顔料付着 回転糸切り未調整
-3	環	12	3.4	7.0	WB礫	A	淡青灰	100	回転糸切り未調整
-4	環	11.8	3.9	5.7	WG礫	A	にふい黄橙	85	回転糸切り未調整
-5	環	12.4	3.3	6.4	WG礫	B	黄灰	95	回転糸切り未調整
-6	環	(11.8)	3.5	6.2	WB礫	B	灰	15	回転糸切り未調整
-7	環	(11.8)	3.5	6.2	WG礫	A	灰	20	回転糸切り未調整
-8	椀	(15.0)	6.2	(7.8)	WG礫	B	灰	20	周辺回転へう削り 歪み大きい
-9	土師器甕	24	(4.2)	—	WG	C	にふい黄橙	15	
-10	土師器甕	(21.6)	(7.0)	—	WGB	B	にふい橙	10	
-11	土師器甕	(20.0)	(6.2)	—	WGB	B	にふい橙	10	
-12	土師器甕	(14.4)	(5.4)	—	WGB	B	にふい橙	20	

第17表 第7号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	図面	断面	厚さ(cm)	胎土	地色	色調	残存	凹面	凸面	端面	側面
89図-13	平	—	—	1.4~2.0	A, B, C	I	灰色	破片	6目 26×29本 周辺調整 一部ナテ	6目 11本	瓦ケズリ	瓦ケズリ
-14	丸	—	—	1.0~1.2	A, B, C	I	灰色	破片	布目 22×23本 粘土継	瓦調整 縦方向	—	瓦ケズリ
-15	平	—	—	1.7~2.0	A, B, C, D	I	灰色	破片	布目 13×22本 周辺調整 糸切面	6目 6本	瓦ケズリ	瓦ケズリ
-16	丸	—	—	1.1~1.3	A, B, C	I	暗青灰色	破片	布目 22×28本 周辺調整	瓦調整 縦方向 瓦目を滑す	—	瓦ケズリ

第8号住居跡 (第90・91図)

丘陵の東から入り込む小支谷によって開析された南側斜面の肩部、J39区に位置している。調査区北側の住居群とは、調査区中央の平坦部を挟んで、南へ約140mの距離を隔っている。

住居南壁の一部は、円形の擾乱をうけていた。

平面の形状は方形で、規模は、長径3.23m、短径2.86m、深さは22cmである。主軸方位はN-57°-Eを指している。

カマドは、東壁中央につくられていたと思われ、焚口部の掘り方など、その痕跡をわずかに留めていた。

カマドの南側から南東隅まで、ローム土を掘り残した厚さ15cm程の高まりがある。また、南東隅から続く南壁も張り出したような高まりが確認できた。

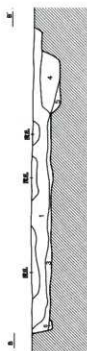
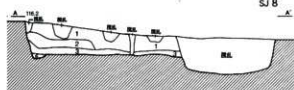
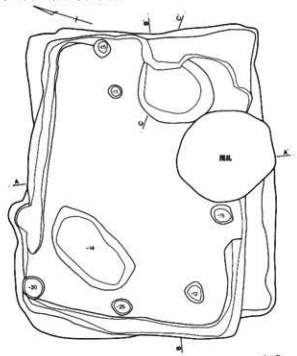
床面は、多少の起伏はあるが平坦で、壁溝は、西壁と北壁、そして東、南壁の一部に確認できた。柱穴は、南壁から西壁ぎわに4基、カマドの北側に2基検出された。柱穴の径は20~35cmである。

住居北西隅には、楕円形の土壇状(長径145cm、短径83cm、深さ14cm)の掘り込みが検出された。

遺物の出土状況を見ると、住居東側のカマド周辺にややまとまりが認められる。

識別個体数は45個体、土師器は甕17個体、須恵器は環8個体、椀4個体、高台付椀1個体、蓋1個体、甕13個体、長頸壺1個体である。また、刀子など鉄製品が4点(第96図1、2、4、7)と、紡錘車(第91図16)1点が出土した。

第90図 第8号住居跡

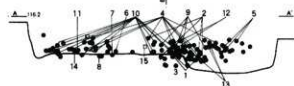
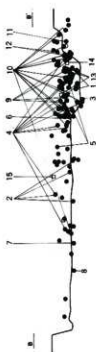
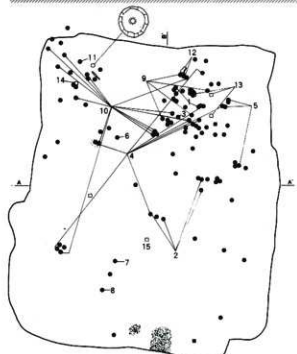


SJ 8 カマド

- 1 暗褐色土：焼土、炭化物粒子
- 2 褐色土：ローム土主体
- 3 暗褐色土：第1層より焼土多、炭化物
- 4 暗褐色土：焼土、炭化物、ローム土多
- 5 褐色土：ローム土主体

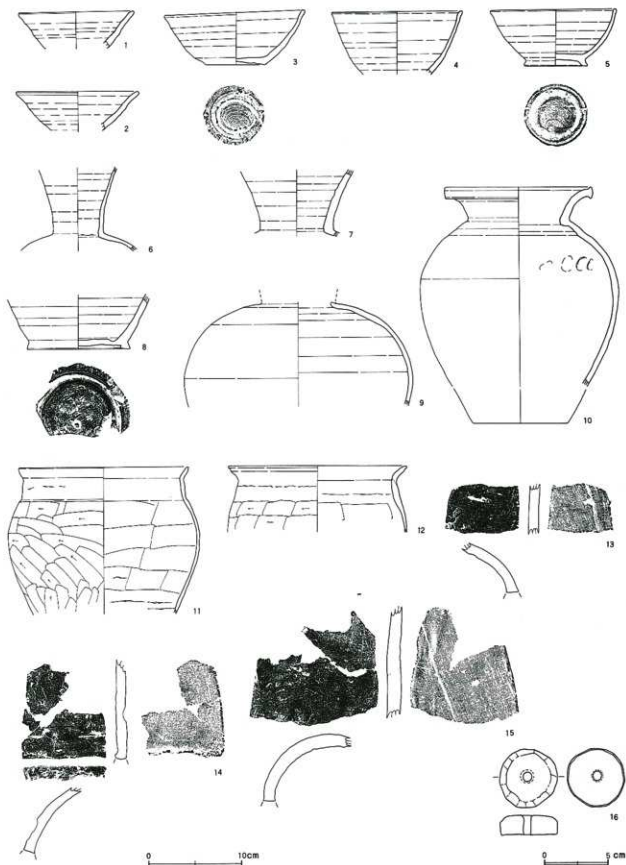
SJ 8

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土：ローム土、灰色土
- 3 暗褐色土：ローム土多
- 4 暗褐色土：焼土、炭化物粒子多
- 5 褐色土：ローム粒子多
- 6 褐色土：ローム土主体



0 2m

第91図 第8号住居跡出土土器・瓦・紡錘車



第18表 第8号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
91図-1	坏	(12.4)	(3.9)	—	WGR	B	淡褐	25	回転系切り未調整
-2	坏	(13.2)	(4.1)	—	WG	B	淡灰褐	20	
-3	柄	15.1	5.6	6.4	WGR礫	B	灰白	80	
-4	柄	(14.0)	(6.7)	—	WGB	B	青灰	10	
-5	高台付柄	13.4	6.0	6.7	WGR礫	B	にふい橙	90	
-6	長頸瓶	—	(8.9)	—	WG	A	にふい褐	10	
-7	甕	—	(7.1)	—	WG	A	黒褐	10	
-8	甕	—	(5.8)	(11.0)	WB	A	灰	40	
-9	甕	—	(11.1)	—	WG針	A	灰	20	
-10	甕	15.5	(21.1)	—	GB礫	B	灰白	55	
-11	土師器甕	(18.0)	(15.6)	—	WBG針	B	橙	15	
-12	土師器甕	(19.0)	(7.0)	—	WGB	B	橙	20	

第19表 第8号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	図面	図面	図面	厚さ(mm)	胎土	物色	色調	残存	間面	凸面	端面	側面
91図-13	丸	—	—	—	1.0	A, C	II	灰褐色	破片	布目 27×26本	瓦調整 横方向	—	瓦ケズリ
-14	丸	—	—	—	1.0	A, C	I	暗灰色	破片	布目 28×28本	瓦調整 横方向	—	瓦ケズリ
-15	丸	—	—	—	1.1~1.4	A, C	II	灰褐色	破片	布目 22×28本	ナデ調整 横方向	瓦ケズリ	瓦ケズリ

第9号住居跡 (第92・93図)

調査区中央のI 39区に位置しており、第8号住から南西方向に約6m離れている。

平面の形状は方形で、規模は、長さ3.23m、短径2.86m、深さは22cmである。主軸方位はN-57°-Eを指している。

カマドは、東壁中央につくられており、全長0.9m、焚口幅0.6mである。袖は、地山のローム土を掘り残して築かれていた。

床面は、ほぼ平坦であり、壁溝は、西壁と北壁、そ

して南壁の一部で確認できた。壁柱穴が、南壁の中央に1基あり、北東隅の外側に張り出して1基、南東隅の外側にも1基、浅いピットを検出した。

遺物の出土状況を見ると、住居南側に集中する傾向が認められる。

識別個体数は30個体、土師器は甕8個体、台付甕1個体、須恵器は坏11個体、柄1個体、高台付柄14個体、高台付皿1個体、甕4個体である。また、欠損した鉄製刀子の一部が(第96図3)が出土した。

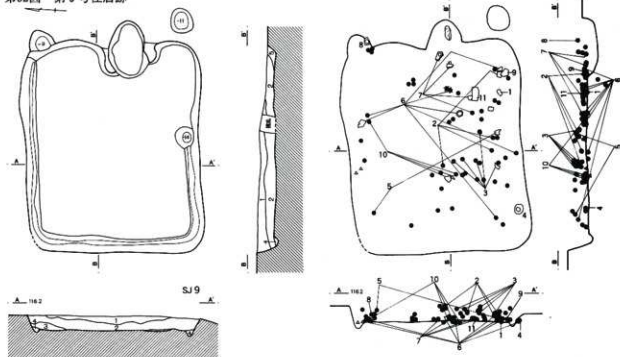
第20表 第9号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
93図-1	坏	(13.0)	4.2	(6.2)	WB礫	B	淡青灰	30	回転系切り未調整
-2	坏	(13.2)	4.1	5.2	WBG礫	B	にふい黄橙	35	
-3	坏	(15.0)	5.1	5.7	WBG礫	A	灰	60	
-4	坏	12.9	5.5	5.9	WBG礫	B	灰褐	100	
-5	坏	(14.0)	(4.6)	—	W礫	B	青灰	25	
-6	高台付柄	18.2	7.3	7.9	WBG礫	A	灰	75	
-7	高台付柄	(18.0)	8.3	8.0	WG礫	B	にふい赤褐	50	
-8	高台付柄	—	(4.0)	6.4	WB礫	C	明灰褐	85	
-9	高台付皿	(15.0)	3.2	6.5	WG針礫	A	灰黄	50	
-10	土師器甕	(21.6)	(6.5)	—	WGB	B	暗赤褐	15	

第21表 第9号住居跡・第28号土壌出土瓦観察表

番号	種類	図面	図面	図面	厚さ(mm)	胎土	物色	色調	残存	間面	凸面	端面	側面
93図-11	平	—	—	—	1.9~2.3	A, B, C	I	灰色	破片	布目 17×20本	周辺瓦調整	縄目 8本	瓦ケズリ
93図-12	丸	—	—	—	1.5~1.8	A, B	I	灰色	破片	布目 23×31本	粘土緑	ナデ調整 縦方向	—

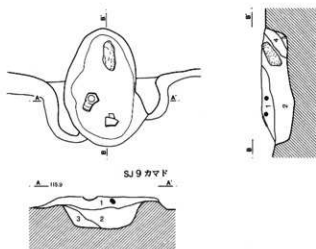
第92図 第9号住居跡



SJ9

- 1 黒褐色土：やや粘性
- 2 黒褐色土
- 3 黒色土
- 4 褐色土：ローム土主体
- 5 灰褐色土：（カマドの崩落土）灰

0 2m

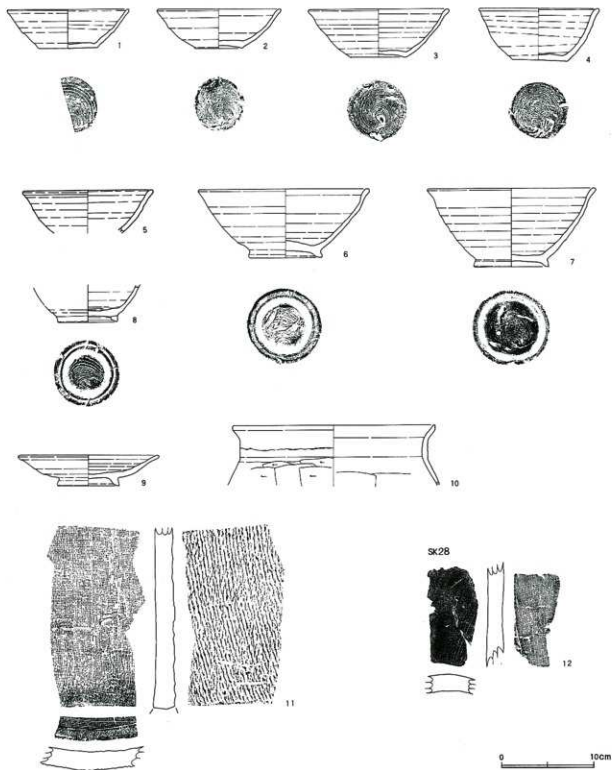


SJ9カマド

- 1 黒褐色土
- 2 赤褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 茶褐色土
- 5 暗褐色土：第3層類似

0 1m

第93図 第9号住居跡・第28号土壇出土土器・瓦



(2) 土 墳

平安時代の土墳は、9基発見された。発見されたのは、第28号土墳が、調査区中央北側の第7号住に近接した地点であり、他の第85～91号は、調査区中央南側の小支谷に沿った北側緩斜面である。

第89号土墳を除く8基の土墳は、平面の形状が円形、断面形は鍋底状となる特徴的な形態であり、覆土は、黒褐色土が3層で堆積していた。

第28号土墳 (第95図)

H25区、第7号住から南東へ約4m離れて位置する。

規模は径1.32m、深さ0.30mである。覆土中層から、帯金具の一部(第94図1)が出土した。

第85号土墳 (第95図)

I 39区、第8号住と第9号住の間に位置する。規模は径1.57m、深さ0.56mである。北側の一部が、攪乱されている。

第86号土墳 (第95図)

I 86区、第85号土墳の東約5mに位置する。規模は径1.58m、深さ0.30mである。

第87号土墳 (第95図)

G40区、第9号住から西へ約6m離れて位置する。規模は径1.53m、深さ0.48mである。

第88号土墳 (第95図)

J 40区、第86号土墳から東へ約6m離れて位置する。規模は径1.17m、深さ0.42mである。手のひら程の碟が、覆土中層からまとも検出され、碟に混じって瓦片3点が出土した。

第89号土墳 (第95図)

J 40区、第88号土墳から南へ2m離れて位置する。平面の形状は不正楕円形で、墳底は凹凸があり、壁はやや傾斜して立ち上がる。規模は長径3.80m、短径3.22m、深さ0.34mである。

墳底の中央と、南側及び西側で、径46～30cm程の浅いビットが検出された。また、覆土中層と、ビット内に、部分的な焼土の堆積が認められた。

第90号土墳 (第95図)

H41区、第89号土墳から南へ7m離れて位置する。

規模は径1.32m、深さ0.50mである。

第91号土墳 (第95図)

G41区、第90号土墳から西へ約2m離れて位置する。規模は径1.11m、深さ0.40mである。

第92号土墳 (第95図)

F42区、第91号土墳から南西へ約14m離れて位置する。規模は径1.32m、深さ0.56mである。

(3) 遺構出土のその他の遺物

腰帯金具 (第94図)

第28号土墳から出土した腰帯の飾り金具で、銅製である。寸法は、横幅33mm、縦幅15mm、厚さ6mmで、垂孔は幅3mm、長さ25mmである。各面は、丁寧に刷った後、革帯側を1mmほど面取りしている。革帯への装着は、金具本体とともに鋳出された脚鉚で行なわれた。表面には、全面に黒漆を塗布している。

この飾り金具は、巡方とともに腰帯を構成する長方形金具で細長孔をもつ。銅製の腰帯の幅は、飾り金具の横幅よりも長くなることはないから、この金具を装着した腰帯は、帯幅33mm以下の烏油腰帯と考えられる。

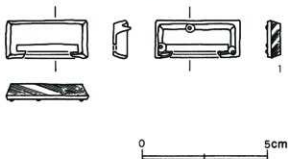
長方形金具の存続時期や、垂孔が細長孔であることなどから、8世紀後半～9世紀初頭に位置づけられる。

鉄製品 (第96図)

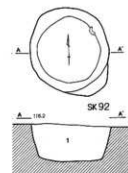
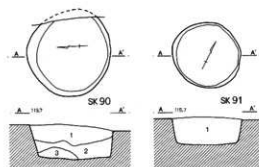
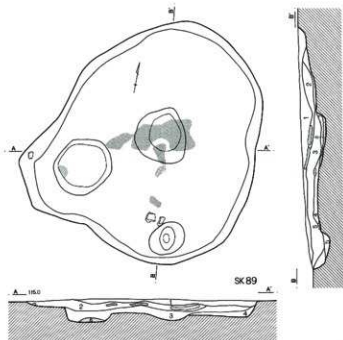
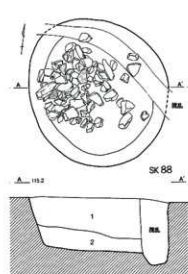
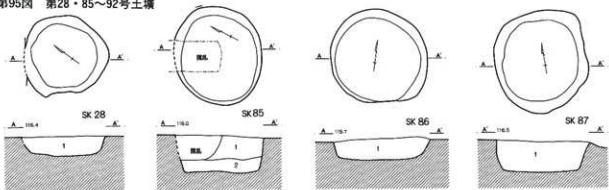
1は、第8号住居跡から出土した刀子で、茎の一部が欠損する。残存長17.8cmで、刀身部の最大幅は1.2cm、断面形は長三角形である。全体的に錆に覆われ、依存状態は不良である。

2の刀子も、第8号住居跡から出土した。茎と刀身部

第94図 第28号土墳出土腰帯金具



第95図 第28・85～92号土壇



SK 28

1 黒褐色土：ローム

SK 85

1 黒褐色土：ローム粒子・ブロック、炭化物粒子、茶褐色土

2 黒褐色土：第1層類似、やや粘性、堅緻

SK 86

1 黒褐色土：暗茶褐色土ブロック、焼土ローム粒子少、やや粘性

SK 87

1 黒褐色土：ローム粒子、茶褐色土、焼土・炭化物粒子

SK 88

1 黒褐色土：ロームブロック多、粘性、堅緻

2 黒褐色土：第1層より硬・瓦多

SK 89

1 暗黄褐色土：焼土・炭化物・ローム粒子、堅緻

2 暗褐色土：焼土・炭化物・ローム粒子少、堅緻

3 黒褐色土：焼土粒子多、炭化物粒子、堅緻

4 暗褐色土：炭化物粒子微、堅緻

5 暗褐色土：焼土粒子少、ロームブロック、やや堅緻

6 黒色土：(炭化物層)

7 暗褐色土：焼土ブロック、炭化物、灰多

8 炭化物層：(黒色)

SK 90

1 黒褐色土：暗褐色土ブロック、やや粘性

2 黒褐色土：黒色土、やや粘性、堅緻

3 黒色土：焼土粒子、暗褐色土ブロック少、やや粘性、堅緻

SK 91・92

1 黒褐色土：暗茶褐色土、ローム粒子少、やや粘性

0 2m

の一部を欠損する。刀身部の最大幅は1.1cmで、断面形は長三角形である。依存状態は不良である。

3は、第8号住居跡から出土した。刀子の刀身部先端の破片で、最大幅は1.5cm、断面形は長方形である。

4は、第8号住居跡から出土した。板状のもので用途は不明である。最大幅は3.3cm、断面形は長方形である。

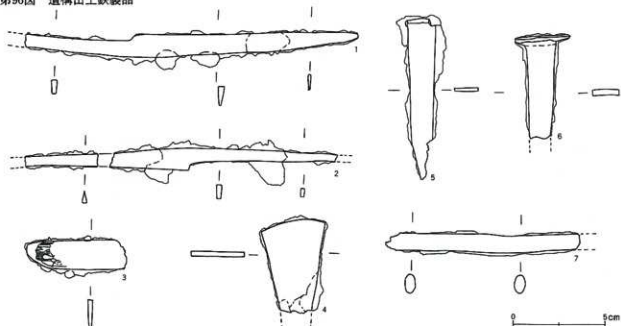
5は、第89号土壌から出土した。楔状のもので、頭部が折り曲げたとように屈曲し、先端は欠損する。残存

長8.4cm、最大幅は1.5cm、断面形は長方形である。

6も、5と同様の製品、第6号溝から出土した。先端部を欠損し、残存長5.4cm、最大幅は1.6cm、断面形は長方形である。

7は、棒状の形態で、用途は特定できず、途中が曲がっている。残存長10.4cm、最大幅は10.0cmで、断面形は楕円形である。第8号住居跡から出土した。

第96図 遺構出土鉄製品

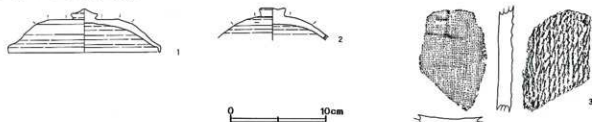


(4) グリッド出土の遺物

グリッド出土の遺物は、第97図に須恵器蓋2点と、

棒文字のある平瓦1点を図示した。

第97図 グリッド出土遺物



第22表 グリッド出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
97図-1	蓋	16.2	4.6		WG礫	B	によい赤褐	45	天井部回転ヘラ削り
-2	蓋		(3.4)		WGB	A	灰	25	天井部回転ヘラ削り

第23表 グリッド出土瓦観察表

番号	種類	図面	図面	図面	厚さ(cm)	胎土	地域	色調	残存	図面	凸面	端面	側面
97図-35	平	—	—	—	1.3~1.6	A, B, F	II	明褐色	破片	布目 17×22本 棒文字「上」	網目 6本	—	—

5 中世以降の遺構と遺物

発見された遺構は、土壇25基、竪穴状遺構3基、集石5基、溝15条である。

これらの遺構のうち、土壇などは、出土遺物からおよその年代を与えられるが、他の遺構については、その形態や覆土の堆積状況を見ると、近世以降まで時期の下るものがあると思われる。

(1) 土壇

土壇は、調査区北側の斜面を降りた、秋津川の低地で12基が集中して発見された。さらに斜面を登った丘陵肩部でも4基まとまって検出された。また調査区中央の平坦部に4基、調査区南側では5基が散在して見つかった。なお、出土遺物については、後述する。

第2号土壇 (第98図)

H10区、調査区北側の低地部に位置する。

平面の形状は、やや不正な円形で、規模は、長径2.01m、短径1.85m、深さ0.22m、平面の規模に比較して、掘り込みの浅い土壇である。

覆土からは、拳大の焼けた礫と、焼土・炭化物が検出された。

第3号土壇 (第98図)

G10区、第2号土壇から西へ約1.5m離れて位置する。

平面の形状は不正楕円形、北壁の一部が突出する。規模は、長径2.67m、短径1.22m、深さ0.19mである。壇底は南側が、楕円形に一段深く掘り込まれている。

覆土上層から中層にかけて、ひと抱えもある大型のものから小粒なものまで、103点の礫が出土した。

第4号土壇 (第98図)

G10区、第3号土壇から南へ約1m離れて位置する。

平面の形状は長方形で、土壇西側はさらに方形に一段深く掘り込まれている。規模は、長径3.42m、短径1.44m、深さは西側で0.51m、東側で0.24mである。南壁ぎわにピットが1基検出された。ピットは、径0.29m、深さ0.21mである。

覆土中層から、焼土・炭化物とともに多量の礫が検

出され、さらに礫を取り去ると損壊した板碑(第107図1～3、第108図1)が折り重なった状態で検出された。

また下層からは古銭5枚(第113図1～5)が出土した。

第5号土壇 (第98図)

G10区、第4号土壇から南西へ約4m離れて位置する。

平面の形状は円形で、規模は、径1.61m、深さは0.44mである。

覆土中層から下層にかけて、71点の礫が出土した。

第6号土壇 (第98図)

G12区、第5号土壇から南へ約16m離れて位置する。

平面の形状は円形で、規模は、径1.24m、深さは0.15mである。

土壇東側に偏って、礫が18点出土した。

第7号土壇 (第98図)

G12・13区、第6号土壇から南西へ約5m離れて位置する。

平面の形状は楕円形で、規模は、長径2.85m、短径1.85m、深さは0.35mである。

覆土中から13点の礫が出土した。

第8号土壇 (第98図)

G13区、第7号土壇から南へ約2m離れて位置する。平面の形状は楕円形で、規模は、長径2.73m、短径1.82m、深さは0.39mである。壇底は北西方向に緩く傾斜する。

土壇西側の偏った地点から礫がまとまって検出され、摺鉢(第106図1)の破片が出土した。

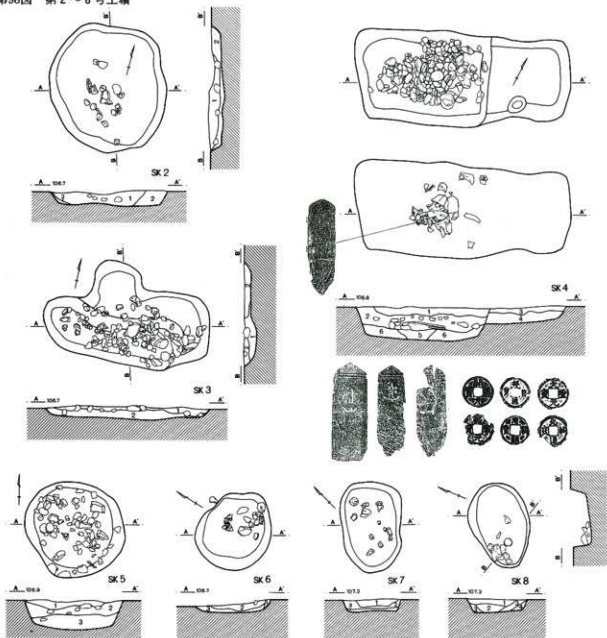
第9号土壇 (第99図)

G13区、第8号土壇から南西へ約2m離れて位置する。

平面の形状は円形で、小型の土壇である。規模は、径1.54m、深さ0.34mである。

覆土上層から46点の礫と欠損した板碑(第108図2)が出土した。

第98図 第2～8号土壌



SK 2

- 1 暗褐色土：砂粒子、ローム・炭化物粒子、やや堅緻
- 2 黒褐色土：ローム・焼土粒子、緻密

SK 3

- 1 暗褐色土：砂粒子、ローム粒子

- 2 褐色土：ローム粒子、やや堅緻

SK 4

- 1 黒褐色土：ローム・炭化物・焼土粒子少

- 2 黒褐色土：礫多、焼土・炭化物・ローム粒子

- 3 暗褐色土：やや堅緻

- 4 黄褐色土：ローム土主体、暗褐色土

- 5 暗黄褐色土：黄褐色土主体、黄褐色砂多、炭化物粒子微、堅緻

- 6 暗茶褐色土：黄褐色砂、炭化物粒子微、焼土堆積（古銭出土）

SK 5

- 1 黒褐色土：ローム粒子

- 2 暗褐色土：小砂利、礫、ローム粒子、粗雑

- 3 黒色土：暗褐色土、砂礫多

SK 6

- 1 黒褐色土：ローム・炭化物粒子微、緻密

- 2 黒褐色土：第1層よりローム粒子多

- 3 黄褐色土：ローム粒子・ブロック多、堅緻

SK 7

- 1 黒褐色土：（SD 5の覆土？）ローム粒子・ブロック、やや堅緻

- 2 黒褐色土：やや堅緻

- 3 黒褐色土：ローム・焼土粒子、堅緻

SK 8

- 1 暗褐色土：ローム粒子、小石少

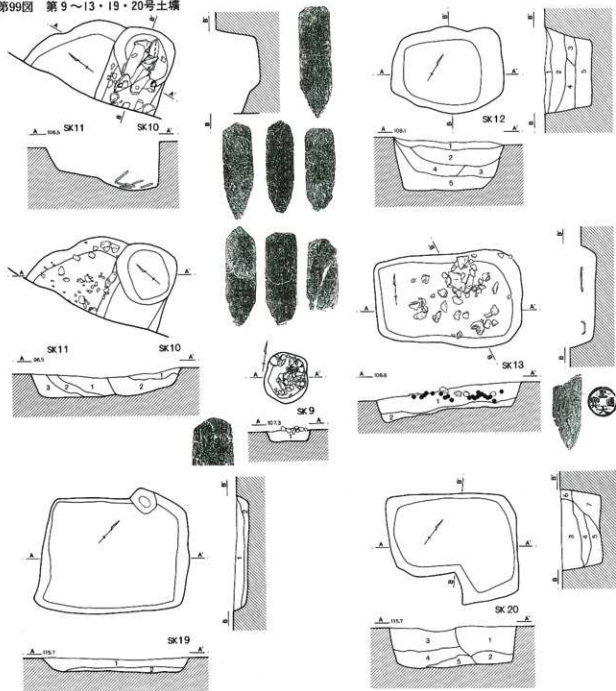
- 2 暗褐色土：第2層より小石多

- 3 暗褐色土：ローム粒子微、堅緻

- 4 暗褐色土：ローム粒子微、堅緻



第99図 第9～13・19・20号土坑



SK 9

1 暗茶褐色土：炭化物粒子、ローム粒子・ブロック微

SK 10

1 暗茶褐色土：ローム粒子、小礫少、やや粘性、堅緻

2 黒褐色土：焼土粒子少、やや粘性

SK 11

1 暗赤褐色土：黒色土ブロック多、小礫

2 暗黄褐色土：ローム・焼土粒子少、やや粘性、堅緻

3 黒褐色土：焼土粒子少、やや粘性、堅緻

SK 12

1 暗茶褐色土：黒色土ブロック多、小礫少、堅緻

2 茶褐色土：ローム粒子少、礫多

3 黒褐色土：砂礫多

4 暗茶褐色土：ローム粒子少、礫

5 暗赤褐色土：砂礫多、やや粘性、堅緻

SK 13

1 茶褐色土：ローム粒子少、焼土・炭化物粒子多、堅緻

2 暗茶褐色土：炭化物粒子少、堅緻

SK 19

1 黒褐色土：ローム土多

2 黒褐色土：ローム土、堅緻

SK 20

1 黒褐色土：ローム土

2 黒褐色土：ローム土多

3 黒褐色土：第1層類似

4 黒褐色土：第2層類似

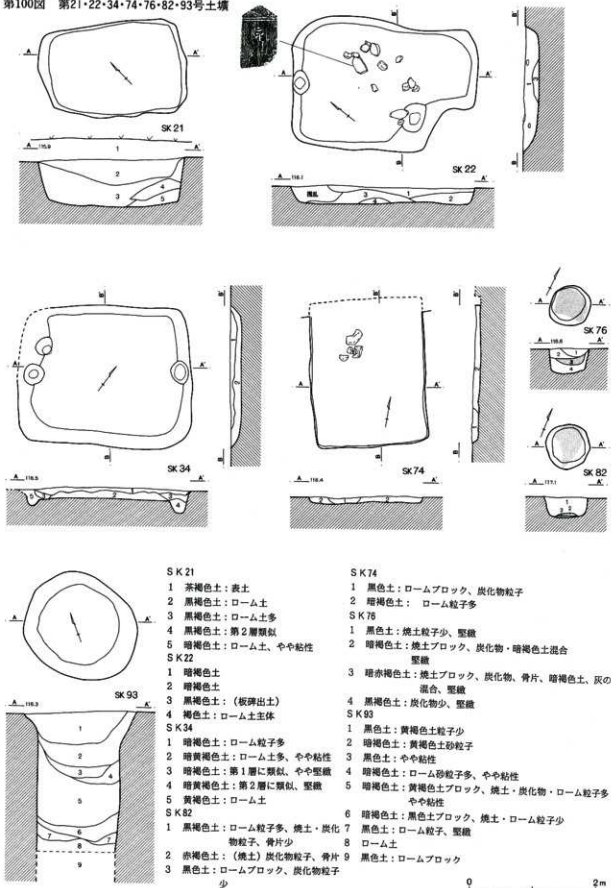
5 黒褐色土：第1層類似

6 暗褐色土

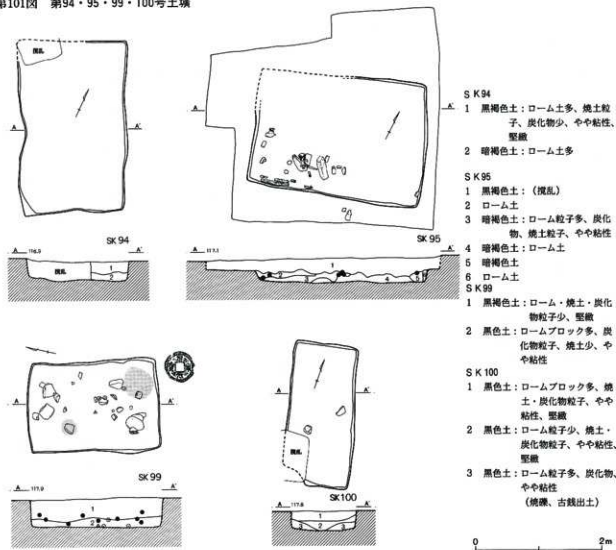
7 黄褐色土：ローム土

0 1 2m

第100図 第21・22・34・74・76・82・93号土坑



第101図 第94・95・99・100号土壌



第10、11号土壌（第99図）

G13区、第9号土壌から南へ約1.5mの地点に位置する。2基の土壌は、重複しており、くわえて遺構の西側は調査区外のため完掘できなかった。

履土の堆積状態から判断して、第10号土壌が新しいものと思われる。第10号土壌は、平面の形状が楕円形で、規模は、長径1.32m、短径0.99m、深さは0.33mである。墳底は西方向へ傾斜しており、西側端部は深さ60cm前後の円形の土壌状に掘り込まれている。

墳底近くから大小の礫とともに、常滑の甕の破片と損壊した板碑が8基（第108図3・4、第109図、第110図1・2）、折れ重なるように出土した。

第11号土壌は、平面の形状が楕円形になるものと推定される。規模は、径1.23m、深さ0.34mである。

焼土の混じった覆土から、大小54点の礫が出土した。

第12号土壌（第99図）

G14区、第10号土壌から南へ約6m離れて位置し、平安時代の第1号住と重複する。

平面の形状は方形で、規模は、長径1.78m、短径1.34m、深さは0.75mである。

覆土中から13点の礫が出土した。

第13号土壌（第99図）

G14区、第12号土壌から南東へ約2mの地点に位置する

平面の形状は方形で、規模は、長径2.35m、短径1.38m、深さは0.32mである。

焼土と炭化物の混じる覆土上層から中層かけて、大小の礫とともに、常滑の甕と土釜、鉢の破片（第106図

2・3・8)、板碑の破片4基(第110図3～6)、そして古銭1点(第113図6)が出土した。

第19号土壌 (第99図)

G21・22区、調査区北側の丘陵肩部に位置する。

平面の形状は方形で、規模は、長径2.33m、短径1.83m、深さ0.19mである。

覆土にローム土を多量に含み、北壁部に、径38cm、深さ20cmのビツが検出された。

第20号土壌 (第99図)

G22区、第19号土壌の南西側に隣接し、平安時代の第5号住と重複する。

平面の形状は、方形の土壌が重複したような「L」字形で、規模は、長径2.00m、短径1.26m、深さは0.60mである。

覆土には、多量のローム土が混じり、かわらけが2点(第106図4・5)が出土した。

第21号土壌 (第100図)

H22区、第20号土壌から東へ約7m離れて位置する。

平面の形状は方形で、規模は、長径2.30m、短径1.49m、深さ0.74mである。

覆土に多量のローム土を含む。

第22号土壌 (第100図)

H23区、第21号土壌から南へ約11m離れて位置する。

平面の形状は、南壁が一部張り出したような方形で、規模は、長径2.91m、短径2.06m、深さは0.24mである。北壁と西壁の屈曲部でビツが検出された。

大小の礫とともに、欠損した板碑(第110図7)が出土した。

第34号土壌 (第100図)

K26区、調査区中央の平坦部に位置し、縄文時代の第2号が穴と重複する。

平面の形状は方形で、規模は、長径2.76m、短径2.19m、深さは0.18mである。東壁の中央に1基、西壁に2基のビツが検出された。

第74号土壌 (第100図)

K34区、第34号土壌から南へ約76m離れて位置する。

北壁は攪乱されており、確認できなかった。平面形

状は方形になるものと推定され、規模は、推定長径2.34m、短径1.86m、深さは0.09mである。

大型の礫とともに、石臼(第112図1)の破片が出土した。

第76号土壌 (第100図)

J35区、第74号土壌から南西へ約15mの地点に位置する。

平面形状は円形で、小型の土壌である。規模は、径0.67m、深さは0.39mである。覆土中から、焼土、炭化物、灰に混じって骨片が出土したが、遺存状態が悪く、種類の特定は困難であった。

第82号土壌 (第100図)

G36区、第76号土壌から南西へ約30mの地点に位置する。

平面形状は円形で、規模は、径0.71m、深さは0.31mである。第76号土壌と同様に、覆土中から、焼土、炭化物に混じって骨片が出土した。

第93号土壌 (第100図)

F44・45区、丘陵の東側から入り込む小支谷に沿った南側斜面に位置する。

径1.85mの円形の井戸である。

第94号土壌 (第101図)

H46区、調査区南側の馬の背状の丘陵上に位置する。平面の形状は方形で、規模は、長径2.69m、短径1.66m、深さは0.27mである。北壁の一部から遺構中央部が攪乱されている。板碑が1点(第111図1)出土した。

覆土には、焼土と炭化物が混在する。

第95号土壌 (第101図)

F47区、第94号土壌から南へ約22m離れて位置する。

遺構の上面を削平されている。平面の形状は方形で、規模は、長径3.23m、短径2.81m、深さは0.39mである。覆土には、焼土と炭化物が混じり、甕の底部破片(第106図6)、鉄製品(第112図2)、礫が出土した。

第99号土壌 (第101図)

E50区、第95号土壌から南へ約28m離れて位置する。

平面の形状は方形で、規模は、長径2.09m、短径1.40m、深さは0.44mである。

多量の焼土、炭化物に混じって、火鉢(第106図7)、板碑(第111図2~4)、古銭(第113図8)そして礫などが出土した。

第100号土壌(第101図)

E50区、第99号土壌の南西側に隣接する。

平面の形状は方形で、規模は、長径2.25m、短径1.06m、深さは0.30mである。

覆土には、焼土、炭化物が混在する。

(2) 竪穴状遺構

土壌と比較して、規模が大きく、炉や柱穴を備え、しっかりした方形の平面形状をとる遺構を、竪穴状遺構とした。

竪穴状遺構は、調査区中央の平坦部で南北方向に点在して発見された。

第1号竪穴状遺構(第102図)

調査区中央の北側、I22区に位置する。平面の形状は方形で、規模は、長径4.15m、短径3.49m、深さ0.20mである。攪乱が顕著である。

床面は平坦で、壁はやや傾斜して立ち上がる。遺構中央からやや西寄りに検出された地焼炉は、よく焼け、炉床は強く締まっていた。柱穴は、北壁に接して1基と、南壁ぎわで1基検出された。

炉の付近から古銭が出土したが、砕けた細片で、種類等は不明である。また、遺構南側で炭化物と焼土の堆積が認められた。

第2号竪穴状遺構(第102図)

K・L29区、第1号竪穴から南へ約63m離れて位置する。平面の形状は方形で、規模は、長径5.52m、短径2.98m、深さ0.31mである。

床面は平坦で強く締まり、壁はやや傾斜して立ち上がる。遺構中央からやや南寄りに、小さな地焼炉が設けられていた。遺構中央には径0.90mの土壌状の掘り込みがあり、南壁の西側も壁に接して、長径1.32m、短径0.50mの範囲で方形に掘り込まれていた。柱穴は、西壁に接して2基、東壁に1基検出され、また南東隅は、ビット状に突出していた。

覆土からは、人頭大の礫とともに、古銭が8枚(第113図9~16)出土した。

第3号竪穴状遺構(第103図)

I37区、第2号竪穴から南へ約82m離れて位置する。平面の形状は方形で、規模は、長径2.88m、短径2.86m、深さ0.39mである。

床面は平坦で、壁はやや傾斜して立ち上がる。遺構中央から南寄りに、地焼炉が設けられ、よく焼けて炉床は強く締まっていた。方形の柱穴は、70~80cmの間隔で壁に接して巡り、南壁西側は、攪乱されているが、方形に張り出していたものと思われる。

遺構北側の覆土上層から、人頭大の礫が密集して出土した。

(3) 集石

集石は、調査区北側の低地に1基と、調査区中央の丘陵上で4基発見された。

第1号集石(第104図)

F・G11区、中世の土壌群内に位置する。平面の形状は、大小の円を重ねたようなダルマ形で、集石下に浅い掘り込みをもつ集石土壌である。規模は、長径3.12m、短径2.03m、深さ0.25mである。

礫は拳大のものが主体で、掘り込みからやや浮いた状態で出土した。火熱を受け赤化した礫が、全体の2割強ある。

第2号集石(第104図)

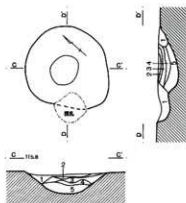
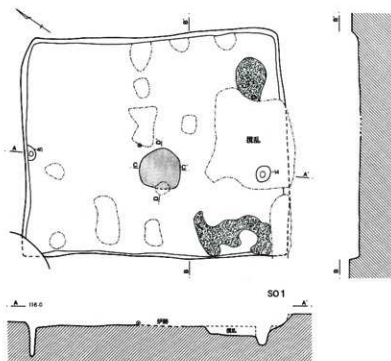
H23区、調査区中央の北側に位置する。中世の第22号土壌と遺構東側で重複しており、本遺構が新しい。平面の形状はほぼ円形で、集石下に断面形が碗状の掘り込みをもつ。規模は、長径1.08m、短径0.95m、深さ0.26mである。

直径10cm大を主体にした礫が、覆土上層から集中して検出された。赤化した礫は含まれていない。

第3号集石(第104図)

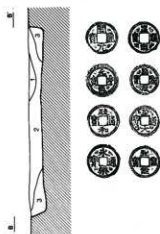
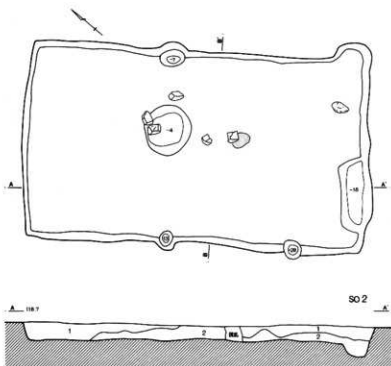
H23区、第2号集石の北側に隣接する。平面の形状はほぼ円形で、集石下に皿状の浅い掘り込みをもつ。規模は、長径0.96m、短径0.88m、深さ0.11mである。

第102図 第1・2号竪穴状遺構



SO1 伊跡

- 1 暗褐色土：攪乱
- 2 黒色土：炭化物主体、焼土
- 3 赤褐色土：焼土主体
- 4 赤褐色土：埴
- 5 暗黄褐色土：ローム土

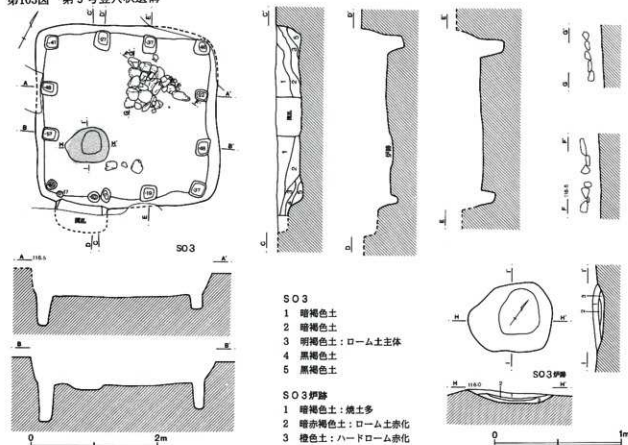


SO2

- 1 暗茶褐色土：ロームブロック多
- 2 黒色土：ローム粒子少
- 3 暗茶褐色土：第1層類似



第103図 第3号竪穴状遺構



直径10cm大の礫のまとまりの中から、古銭が1枚（第113図17）出土した。赤化した礫は含まれていない。

第4号集石（第104図）

H23区、第3号集石の北側に位置し、平安時代の第6号住と重複する。平面の形状は楕円形で、集石下に皿状の浅い掘り込みをもつ。規模は、長径1.80m、短径1.43m、深さ0.20mである。

拳大を主体とした礫の集中は、覆土上層から下層まで及んでいる。赤化した礫は含まれていない。

第5号集石（第104図）

G23区、第3号集石から西へ約3m離れて位置する。平面の形状はほぼ正方形で、集石下に皿状の浅い掘り込みをもつ。規模は、長径2.49m、短径2.16m、深さ0.14mである。

直径10cm大の礫が、覆土上層に散在する。赤化した礫は含まれていない。浅いピット状の掘り込みが、4箇所検出された。

(4) 溝（第105図）

溝は15条発見したが、全てを図示できなかったのも、全体図（第6～8図）も併せて参照された。

第1号溝は、調査区北側の斜面部で、等高線に沿って北東から南西方向に伸びる溝で、農道下に発見された。

第2号溝は、南東方向から伸びてこれに直交する。

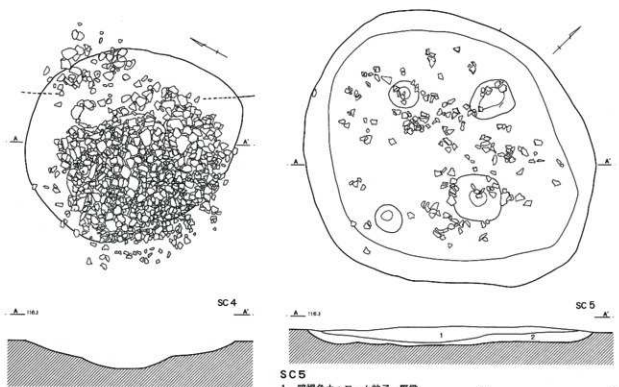
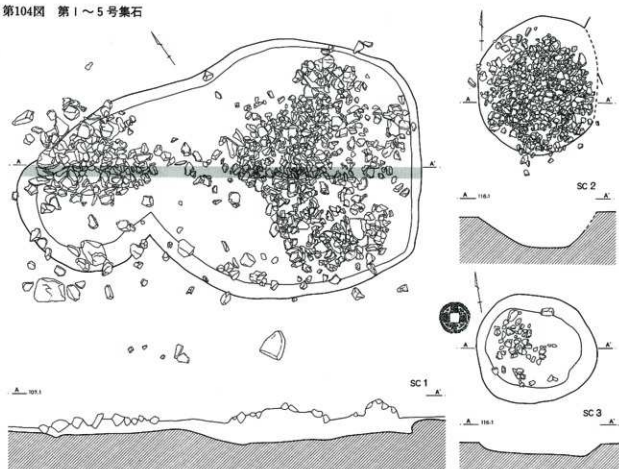
第3～5号溝は、調査区北側の低地で発見された。

第3号溝は、調査区の隅にわずかにかかったもので、全体像を把握できない。第4号溝は、調査区を北東から南西方向に横切っており、形態的には第2号溝に類似する。第5号溝は北東から南西方向に伸びる溝で、調査区内で完結する。中世の第7号土壌を切っつけられていた。

第6、9、10、12、13号溝は、第1号溝と同様に、現道下やそれに沿って発見された溝である。

第7、8、11、14、15号溝は、浅く規模の小さな溝

第104図 第1～5号集石

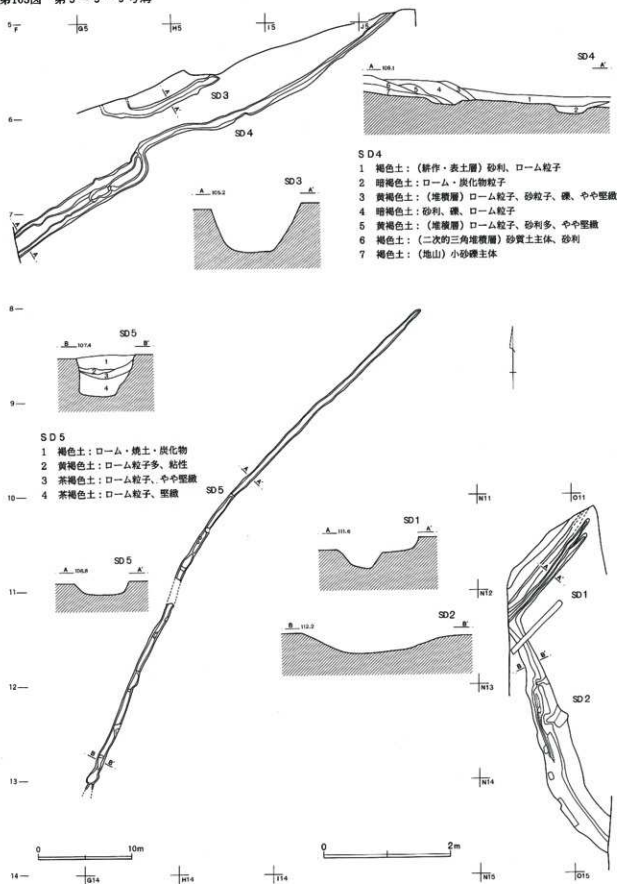


SC5

- 1 暗褐色土：ローム粒子、堅微
- 2 暗褐色土：ローム土多、やや粘性、堅微

0 1m

第105図 第3～5・9号溝



で、途中で途切れてしまう。

これらの溝は、およそ土地の境界、区画に関連すると推察され、近世以降のものであろう。

(5) 遺構出土の遺物

土器 (第106図)

1は、第8号土壌から出土した瀬戸産の摺鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、端部は内湾する。

内面の卸目は粗く、等間隔に刻まれる。使用痕は、卸目の下方に集中し、部分的に消される程使い込まれている。

2、3は、第13号土壌から出土した。2は、在地産の土釜である。体部上半に鈎が付く、いわゆる茶釜形である。粘土紐を積み上げ、横ナデ調整の痕跡が認められる。

鈎は、補足粘土を用いて、対角に2箇所付く。瓦質で、本来は蓋がつくものと考えられる。

3は、在地産の鉢である。体部は直線的に開き、口縁部でさらに外反して立ち上がる。

体部外面は縦方向のヘラケズリ、口縁部の内外面及び体部内面は横方向のナデ調整が行われる。器面の風化は著しいが、僅かに粘土紐を積み上げた痕跡が認められる。

4、5は、第20号土壌から出土したかわらけの皿で

第24表 中世土壌出土土器観察表

番 号	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 遺 構
図106—1	摺鉢	(28.0)	(6.7)	—	WB礫	B	茶褐	10	SK8
—2	土鍋	14.6	18.0	19.0	WBGR 礫	C	にぶい黄橙	70	SK13
—3	鉢	(26.4)	(14.8)	—	WG礫	C	橙	20	SK13
—4	かわらけ	13.8	3.1	8.4	WGR	C	橙	85	SK20
—5	かわらけ	(13.8)	2.6	(8.7)	WGB	B	浅黄橙	30	SK20
—6	甕	(10.1)	19.2	—	WG礫	C	黒褐	35	SK95
—7	火鉢	(26.2)	9.6	(17.2)	WG礫	C	灰	15	SK99
—8	甕	—	—	—	W礫	A	茶褐	20	SK10, 13

板碑 (第107—111図)

第107図1～3、第108図1は、第4号土壌から出土した。4基は、火熱により茶褐色から赤褐色に変色し、部分的にタールが付着する。

第107図1は、基部を欠損し、裏面は部分的に剝離する。寸法は、長さ66.4cm、幅23.4cm、厚さ3.0cmである。

ある。ともに体部から口縁部にかけて直線的に外反し、端部は薄くつくられる。

内外面はロクロナデ、底部は回転系きりで成形される。また、見込みの部分は、ハケ状工具で器面を調整している。

6は、第95号土壌から出土した。在地産甕の胴下半部から底部にかけての破片である。内外面、底部ともナデによって調整される。胴部のナデは、粘土紐ものの巻き上げに沿って、横方向に行われる。

7は、第99号土壌から出土した、瓦質の火鉢である。器面は外面の風化が著しい。脚部は欠損しているが、本来は短く平らな脚部を三箇所所持つものと考えられ、脚部を接合しやすくするための、刺突状の痕跡が残る。

底部は平底で、内面には不定方向のナデで調整される。体部から口縁部にかけて、内湾気味に立ち上がり、やや厚めの端部は平坦に成形される。口縁部には、直径約1cmの竹管風の刺突文が等間隔で廻る。

8は、常滑産大甕の肩部から胴部にかけての破片で、第10号と13号土壌のから出土した破片が接合した。

肩部付近は、粘土紐の積み上げに沿って、丁寧に横方向にナデられている。

遺物の年代については、1～3・6は15世紀後半、7は15～16世紀、4・5は15世紀、8は14世紀前半と考えられる。

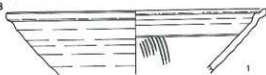
表面は平滑に仕上げられ、彫刻は極めて鋭い線で施されている。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

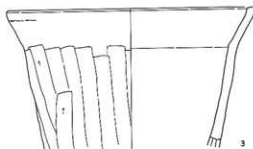
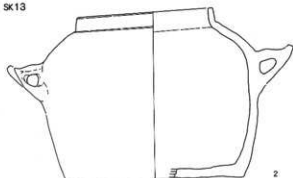
銘文は、右行から「法道禅」、「應永升三年(「丙」、「申」)八月日」、「道修門」と刻まれている。

第106図 土壇出土土器

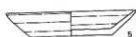
SK 8



SK 13



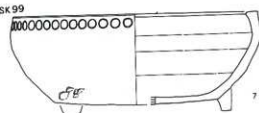
SK 20



SK 95



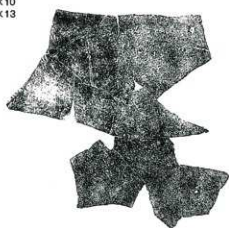
SK 99



0 10cm

SK 10

SK 13



0 10cm

片葉研彫の二条線と枠線が施されている。

2は、体部右片を欠損する。大きく4枚に割れて出土した。寸法は、長さ61.4cm、幅19.0cm、厚さ3.3cmである。

主尊種子はキリークで、独尊形式である。蓮座をもつ。

銘文は、「广安元年十月日」である。片葉研彫の二条線が施されている。

3は、体部上半と山形の一部を欠損し、裏面も大きく剥離する。バラバラに割れて出土した。寸法は、長さ61.5cm、幅20.5cm、厚さ2.3cmである。

主尊種子はキリークで、独尊形式である。蓮座をもつ。

銘文は、「應安□年四月廿日(□)」である。片葉研彫の二条線が施されている。

第108図1は、ほぼ完形の状態で出土した。寸法は、長さ65.0cm、幅18.8cm、厚さ2.9cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「道中」、「逆」、「延徳二年(「庚」、「戌」)□□日」、「修」、「禪門」と刻まれている。割付線が残る。

なお、主尊の彫りの処々には金箔が認められた。これを、顕微鏡で観察すると、彫り面に漆が塗られ、その上に金箔が貼られていることがわかった。

第108図2は、第9号土壌から出土した。主尊の刻まれた上半部の破片である。割れ口は、切断したように鋭利で直線的な断面である。

寸法は、長さ20.4cm、幅19.2cm、厚さ2.0cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。

月輪と蓮座をもち、割付線が残る。

第108図3・4、第109図、第110図1・2は、第10号土壌から出土した。8基は、火熱により茶褐色から赤褐色に変色し、部分的にタールが付着する。

第108図3は、山形の先端部を欠損し、表裏面とも部分的に剥離する。寸法は、長さ53.7cm、幅19.0cm、厚

さ2.6cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「逆 延徳二天」(花瓶)、「良順律師」、「修 十一月日」(花瓶)と刻まれている。

主尊、脇侍、そして蓮座の彫りの処々に金箔が認められる。割付線が残る。

第108図4は、表裏面が部分的に剥離するものの、ほぼ完形である。寸法は、長さ57.2cm、幅18.2cm、厚さ2.4cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「逆 延徳二天」(花瓶)、「道秀禪門」、「修 十一月日」(花瓶)と刻まれている。

銘文と花瓶の彫りの処々に金箔が認められる。割付線が残る。

第109図1は、山形の先端部を欠損するが、ほぼ完形である。寸法は、長さ55.4cm、幅16.7cm、厚さ2.6cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「延徳二天」(花瓶)、「□□□□(四郎□郎?)逆修」、「十一月日」(花瓶)と刻まれている。

金箔は確認できないが、彫り面の一部に漆の痕跡が認められる。割付線が残る。

第109図2は、山形の先端部と基部の先端を欠損する。寸法は、長さ48.6cm、幅19.4cm、厚さ2.2cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「延徳二天」(花瓶)、「妙善禪尼」、「十一月日」(花瓶)である。

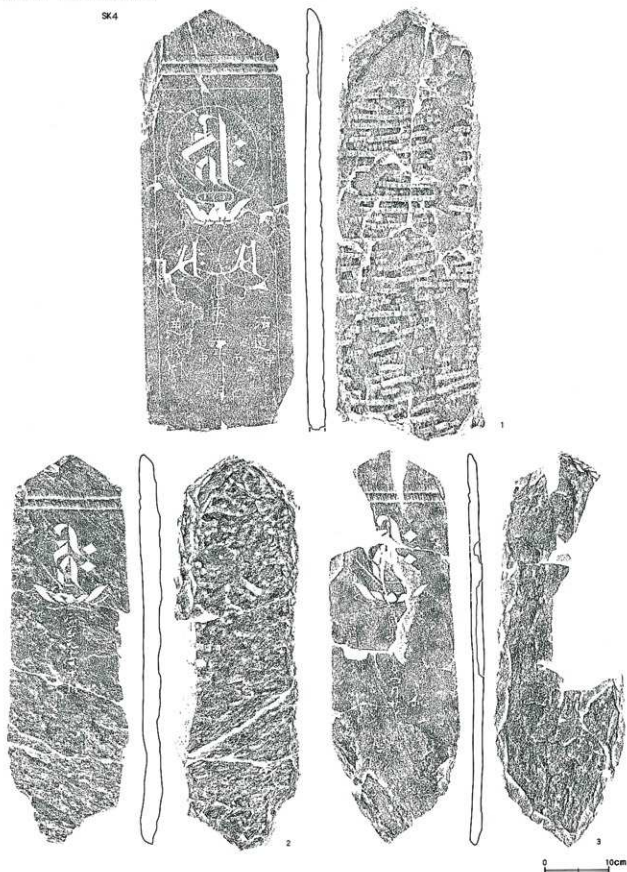
主尊、脇侍、そして蓮座の彫りの処々に金箔が認められる。割付線が残る。

第109図3は、ほぼ完形であるが、裏面の剥落が著しい。寸法は、長さ60.6cm、幅18.4cm、厚さ2.2cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿

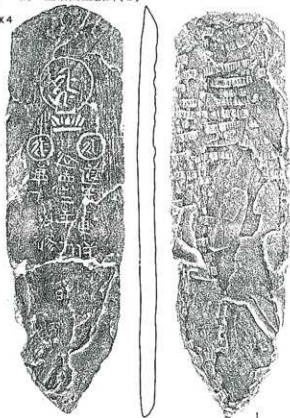
第107図 土壇出土板碑(1)

SK4

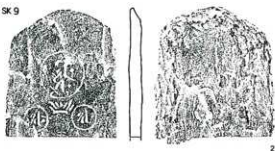


第108図 土境出土板碑(2)

SK 4

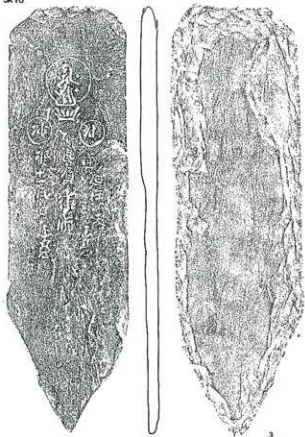


SK 9

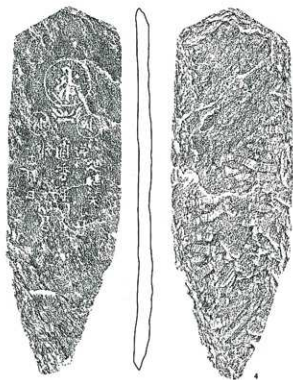


2

SK 10



3

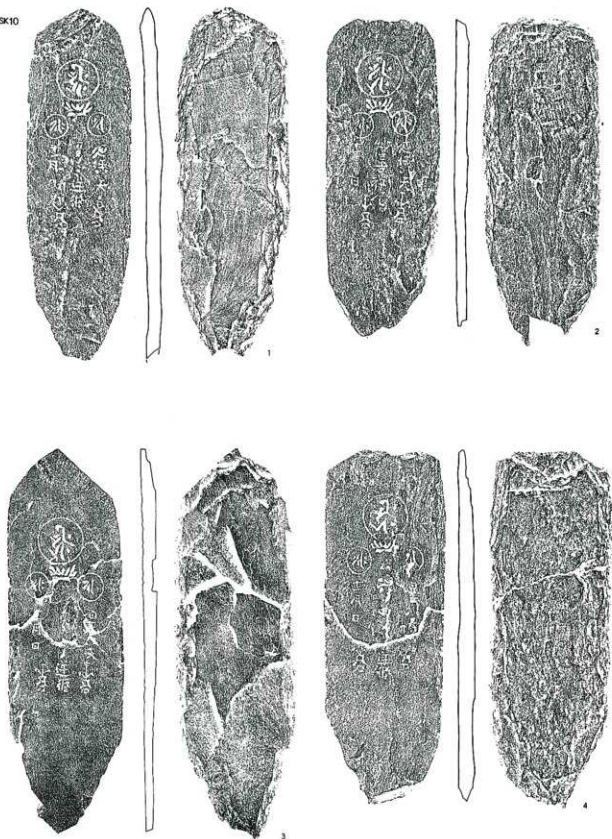


4

0 10cm

第109図 土壇出土板碑(3)

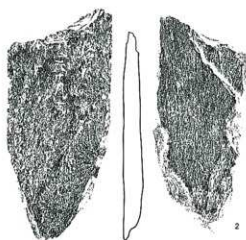
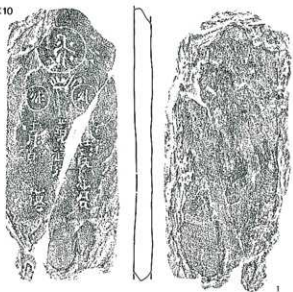
SK10



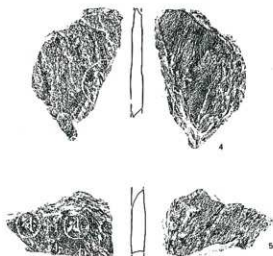
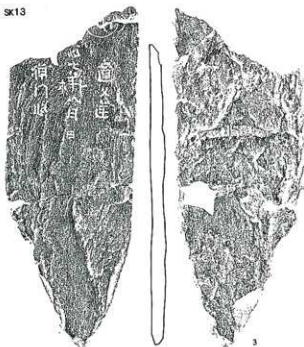
0 10cm

第110圖 土壙出土板碑(4)

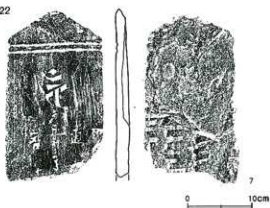
SK10



SK13



SK22



0 10cm

弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「延□(徳)二天」(花瓶)、「左エ門□(仁?)郎逆修」、「十一月日」(花瓶)である。

右行の銘文の彫りの処々に金箔が認められる。割付線が残る。

第109図4は、山形の先端と基部の先端が欠損する。寸法は、長さ55.7cm、幅19.4cm、厚さ2.8cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「延徳二天」(花瓶)、「□□□□(六郎四郎?)逆修」、「十一月日」(花瓶)である。

主尊、脇侍の彫りの処々に金箔が認められる。割付線が残る。

第110図1は、山形の先端と下半部が欠損する。寸法は、長さ42.9cm、幅20.0cm、厚さ2.8cmである。

主尊種子はキリーク、脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。月輪と蓮座をもつ。

銘文は、右行から「□(延)徳二天」(花瓶)、「正現禅尼」、「十一月日」(花瓶)である。

割付線が残る。

第110図2は、下半から基部の破片で、風化が顕著である。寸法は、長さ32.7cm、幅16.8cm、厚さ3.2cmである。

銘文は、右行から「修」、「天□(十?)月日」が判読できる。

第110図3～6は、第13号土壌から出土した。完形個体はなく、全て破片である。火熱により部分的に変色し、タールが付着する。

3は、下半部から基部の破片である。寸法は、長さ47.4cm、幅20.2cm、厚さ2.3cmである。

脇侍種子と月輪の一部が認められることから、三尊形式のものであろう。銘文の彫り方や全体的なつくりをみると、「延徳二天」銘の板碑と同形態のものと思われる。

銘文は、右行から「道□(久?)逆」、「□(文)明七年□(乙)未八月日」、「神門 修」である。

割付線が残る。

4は、主尊が彫られた部位の破片である。寸法は、長さ17.2cm、幅5.8cm、厚さ2.0cmである。

3と同様に「延徳二天」銘と同形態であらう。

5は、脇侍が彫られた部位の破片である。

寸法は、長さ10.7cm、幅17.6cm、厚さ2.2cmである。脇侍種子は、サとサクで、阿弥陀三尊形式である。

月輪と蓮座をもち、蓮座の部分に金箔が認められる。

銘文は、右行から「延□(徳)」、「妙□」と判読できる。割付線が残る。

「延徳二天」銘と同形態であらう。

6は、主尊の彫られた部位の破片である。寸法は、長さ13.8cm、幅11.6cm、厚さ2.0cmである。

割付線が認められる。

「延徳二天」銘と同形態であらう。

第110図7は、第22号土壌から出土した。上半部の破片である。火熱により変色し、表裏面の剥落が目立つ。

寸法は、長さ26.6cm、幅15.6cm、厚さ2.1cmである。

主尊種子は、バンで、独尊形式である。二条線と薄く枠線が認められる。

銘文は、右行から「道」、「□□□□」、「□十」である。

第111図1・2は、第94号土壌から出土した。

1は、脇侍の彫られた部位の破片で、火熱により変色する。寸法は、長さ16.6cm、幅10.0cm、厚さ2.0cmである。

脇侍種子はサで、月輪をもつ。銘文は、右行から「了善」、「文明四年三月」である。

2は、主尊の彫られた部位の破片で、火熱により変色し、タール文が付着する。寸法は、長さ20.0cm、幅9.7cm、厚さ2.2cmである。

二条線と枠線が施されていることがわかる。

第111図3・4は、第99号土壌から出土した。

3は下半部の部分破片である。火熱による剥落が顕著で、銘文等は不明であるが、枠線が認められる。

寸法は、長さ19.6cm、幅23.4cm、厚さ3.0cmである。

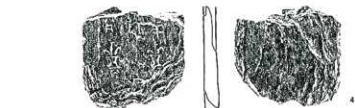
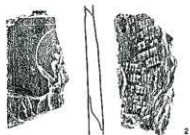
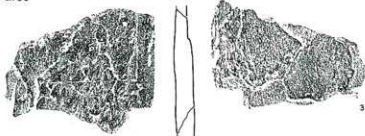
4も下半部の部分破片で、火熱を受けている。寸法は、長さ14.5cm、幅16.6cm、厚さ2.1cmである。

第111図 土壌出土板碑(5)

SK 94



SK 99



0 10cm

銘文は、「年」(花瓶)、「月」(花瓶)が僅かに読み取れる。割付線が残る。

板碑の紀年名についてみると、第4号土壌では、應安年間(1368~74)、應永二十三年(1416)、延徳二年(1490)のものが出土している。第10号土壌は、全て延徳四年(1492)である。第13号土壌は、文明七年(1475)と延徳四年(1492)があり、第94号土壌では、文明四年(1472)がある。

最も古い應安年間のものが2基あり、最も新しい延

徳四年のものが、確認できただけで8基ある。その他は各1基である。

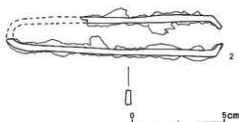
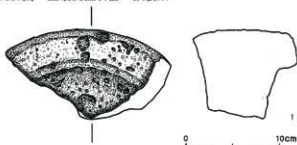
石器(第112図1)

第74号土壌から出土した石臼で、全体の1/6を残存する。残存長9.5cm、厚さ10.1cmで、石材は砂岩である。

鉄製品(第112図2)

第95号土壌から出土した毛抜きで、折曲げた基部の一部を欠損する。残存長11.4cm、最大幅4.4cmで、全体を錆が覆い、依存状態は不良である。

第112図 土壌出土石器・鉄製品



古銭(第113図)

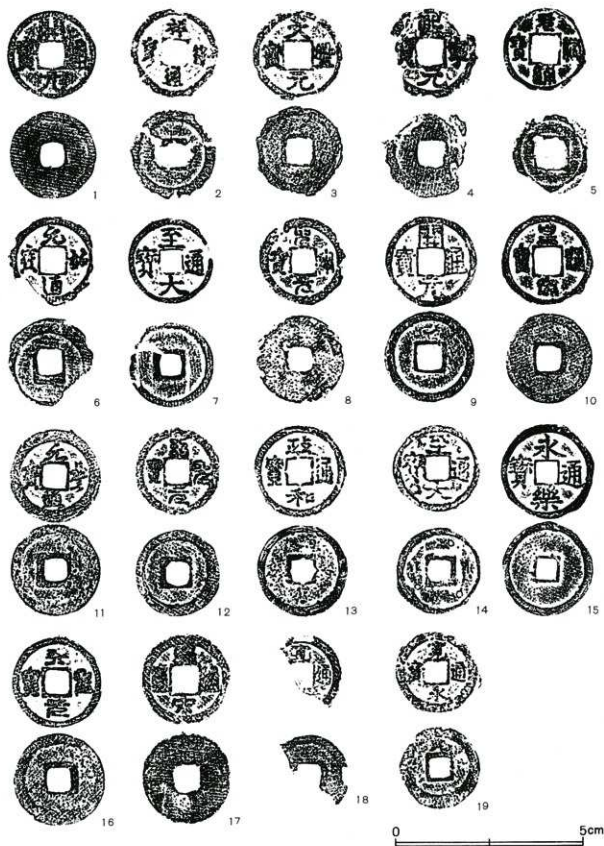
古銭は、21枚出土し、19枚を図示する。残りの2枚は破砕した小破片であるため、種類を特定できなかった。また、このうちの1点は、第1号竪穴状遺構から出土した。

古銭の遺存状態は、良好とは言えず、緑青がよく吹

いており、縁の欠けたものが多い。

図示した古銭の種類、出土遺構等については、古銭観察表のとおりである。内訳は、唐銭1種2枚、北宋銭9種12枚、元銭1種2枚、明銭1種1枚、寛永通寶2枚である。

第113図 土壇出土古銭



第25表 古銭觀察表

番 号	銭 名	錢徑(mm)	内徑(mm)	錢厚(mm)	量目(g)	出 土 構
113回-1	開元 通寶	23.9	22.8	0.9	1.95	SK 4
-2	祥符 通寶	23.8	22.8	1.1	1.4	SK 4
-3	天聖 元寶	24.7	22.8	1.3	3.18	SK 4
-4	熙寧 元寶	23.8	(21.8)	0.8	1.21	SK 4
-5	元祐 通寶	23.9	22.5	1.1	1.63	SK 4
-6	至大 通寶	23.1	22.5	1.2	1.51	SK13
-7	元祐 通寶	19.0	19.6	1.1	1.62	SK66
-8	聖宋 元寶	23.9	22.7	1.2	2.99	SK99
-9	開元 通寶	24.1	20.9	1.3	3.32	SO 2
-10	皇宋 通寶	23.9	22.1	1.1	3.08	SO 2
-11	元豐 通寶	25.1	24.4	1.1	3.45	SO 2
-12	紹聖 元寶	23.5	22.2	1.1	2.71	SO 2
-13	政和 通寶	24.6	23.3	1.3	3.69	SO 2
-14	至大 通寶	23.4	21.8	1.9	4.11	SO 2
-15	永樂 通寶	24.2	24.3	1.9	6.01	SO 2
-16	天聖 元寶	24.2	22.6	1.2	3.26	SO 2
-17	皇宋 通寶	24.1	23.4	1.1	2.59	SC 3
-18	寬永 通寶	(17.5)	(16.2)	0.9	0.62	J 21区表採
-19	寬永 通寶	22.2	20.9	1.3	2.14	表採

第26表 遺構番号新旧対照表

遺 構 名 称	旧 番 号	時 期	遺 構 名 称	旧 番 号	時 期
第1号炉穴	SI 1	縄文	第5号住居跡	SJ 9	平安
第2号炉穴	SI 2	縄文	第6号住居跡	SJ 8	平安
第3号炉穴	SI 3	縄文	第7号住居跡	SJ10	平安
第4号炉穴	SI 4	縄文	第8号住居跡	SJ 7	平安
第5号炉穴	SI 5	縄文	第9号住居跡	SJ11	平安
第6号炉穴	SI 6	縄文	第1号溝	SD13	中世以降
第7号炉穴	SI 7, 8	縄文	第2号溝	SD12	
第8号炉穴	SI 9	縄文	第3号溝	SD10	
第9号炉穴	SI10	縄文	第4号溝	SD 9	
第10号炉穴	SI11, 12	縄文	第5号溝	SD 5	
第11号炉穴	SI14	縄文	第6号溝	SD15	
第12号炉穴	SI15	縄文	第7号溝	SD16	
第13号炉穴	SI16	縄文	第8号溝	SD19	
第14号穴	SI17	縄文	第9号溝	SD20	
第1号柄鏡形敷石住居跡	SJ 5	縄文	第10号溝	SD11	
第2号柄鏡形敷石住居跡	SJ 6	縄文	第11号溝	SD16	
第1号住居跡	SJ 1	平安	第12号溝	SD14	
第2号住居跡	SJ 2	平安	第13号溝	SD17	
第3号住居跡	SJ 3	平安	第14号溝	SD18	
第4号住居跡	SJ 4	平安	第15号溝		

IV 坂東山西遺跡の調査

1 遺跡の概観

坂東山西遺跡は、加治丘陵の東端部に所在する。加治丘陵は、外秩父山地から東へ半島状に突き出た丘陵で、丘陵の南側に沿って霞川が、また北側では入間川が東流する。入間川を臨む丘陵北側は、北東方向に向う谷が発達し、複雑な地形を形成している。

本遺跡は、丘陵の北側に位置しており、丘陵の南側には坂東山西遺跡が霞川に沿って広範囲に分布する。両遺跡は、秋津川と呼ばれる小河川が開析した谷によって、地形的に分けられている。

また遺跡の北側は、隣接する森坂遺跡との間に、小支谷が北東方向から樹枝状に入り込んでいる。

したがって、遺跡は、南北二つの谷に挟まれた丘陵上に立地しており、その範囲は、北東 南西に長く、地形に沿って楕円形を描くように広がっている。

今回の調査は、南北方向に走る国道299号線に沿った両側の地点で、遺跡範囲の中央や東寄りを横断するように行われた。

調査地の地形は、南北の谷に挟まれた馬の背状となっている。中央部は、ほぼ平坦で、西から東へ緩やかに傾斜している。南側は、急傾斜で、秋津川の低地となり、北側も谷に向かって傾斜している。

調査地中央部の標高は、115mから114mで、秋津川との比高差は約10m、北側の谷との比高差は約8mである。

調査区は、南北方向に長く延長150m、東西方向の幅は、国道299号線を挟み約50mである。

現在の遺跡周辺の景観は山林と畑地であるが、国道299号線が丘陵を東西に分断し、あまり閑静なところとは言えない。今後圏央道の建設によって、この地域の風景はさらに変わって行くことであろう。

なお、調査対象地について、あらかじめ第1次調査を実施した結果、国道の西側の地点で一部地山が削平されていたため、この区域は本調査から除外した。これは第4図に第1次調査地点として示した。

本遺跡の調査では、縄文、平安時代、そして中世以降の遺構・遺物が検出された。

縄文時代

早期後半の炉穴が11基、調査区の平坦部で広範囲に検出された。とくに中央付近で6基が集中して一群をなしていた。条痕文系土器が出土している。

前期黒浜式期の住居跡は、平坦部の南側で発見された。蛇紋岩製の扶状耳飾などが出土した。

土壌は、調査区全域で、丘陵斜面にまで及んで発見された。37基検出されたが、その内23基は落し穴とされる形態のものである。平坦部中央でまとまって発見された土壌から、前期終末期の土器が出土した。

その他にグリッドから早期の押型文・沈線文系土器が出土したが、遺構は確認できなかった。

平安時代

平安時代の住居跡は、調査区南側の緩斜面につくられていた。斜面地であるため堅穴は確認できず、カマドが検出されただけであるが、周辺から該期の遺物が出土した。

遺物集中地点としたのは、国道を挟んで西側の調査区の南端で、平安時代の遺物がまとまって出土した地点を指している。遺構らしきものは確認できなかった。

また西側調査区のグリッドからは瓦片も出土しており、中世の溝からは郡名瓦が採集された。

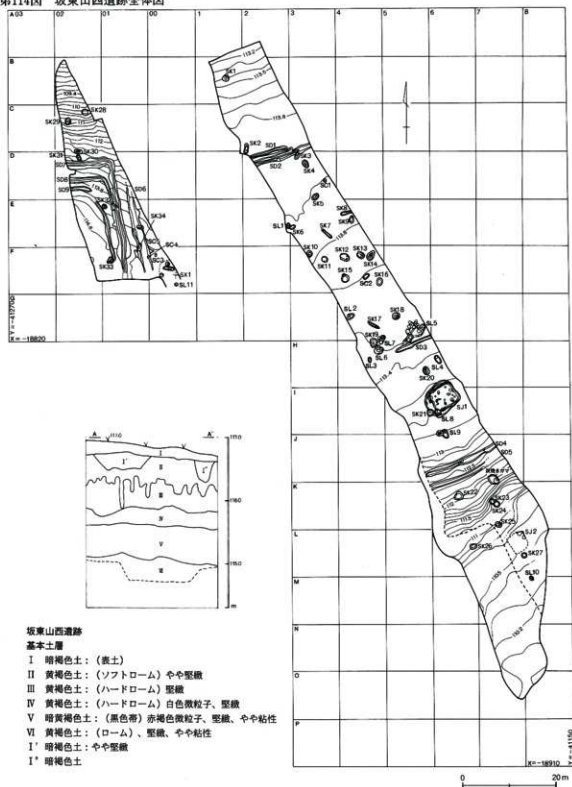
中世以降

集石が5基、調査区内に点在して検出された。礫とともに瓦片などを混じえてつくった小規模なものである。

溝は丘陵肩部で、複数条の単位で、等高線に沿って廻っているものが検出された。第4号溝から板碑が出土している。

炭焼き窯は、南側斜面で発見された。近世以降のものであろう。

第114図 坂東山西遺跡全体図



2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 炉 穴

第1号炉穴 (第115図)

E2区、調査区の平坦部北寄りに位置する。平面の形状はほぼ円形で、規模は、径0.9m、深さ0.24mである。炉址は、断面形がすり鉢状となる掘り込みの中央に設けられ、よく焼け、堅く締まった炉床であった。

第2号炉穴 (第115図)

G4区、第1号炉穴から南東方向へ約22m離れて位置する。西側の一部に攪乱を受けるが、平面の形状は楕円形になるものと思われる。規模は、長径1.48、短径0.96m、深さ0.19mである。

炉址は、長軸線方向の西側に設けられていた。よく焼け、堅く締まった炉床であった。

第3号炉穴 (第115図)

H4区、第2号炉穴から南東方向へ約8m離れて位置する。平面の形状は楕円形で、規模は、長径0.98、短径0.61m、深さ0.17mである。

炉址は、遺構中央に設けられており、焼土が残存する程度であった。

第4号炉穴 (第115図)

H6区、第3号炉穴から東へ約13m離れて位置する。平面の形状は楕円形で、規模は、長径1.81、短径0.92m、深さ0.38mである。

炉址は、長軸線方向の北端をやや掘り窪めてつくられており、よく焼けて、堅く締まった炉床であった。

第5号炉穴 (第115図)

G・H5区、第3号炉穴から北東方向へ約7m離れて位置する。周りには、第3・4・6・7号の4基の炉穴が取り囲むように位置する。

平面の形状は、いくつかの楕円形の土壌が不規則に重複したような、いわゆるタコ足状の形態である。おそらく炉をつくり直しながら、段階的な拡張をくりかえした結果と考えられるが、新旧関係は、確認できなかった。

規模は、南北方向約3.40m、東西方向約3.80m、深さは最も深い中央南側で0.24mである。

炉址は、11基検出されたが、主に楕円形に掘り込まれた突端部につくられていた。また遺構中央につくられた炉址からは、拳大の焼礫が、まとまって出土した。

第6号炉穴 (第116図)

H4区、第5号炉穴から西へ約4m離れて位置する。平面の形状は楕円形で、規模は、長径1.87、短径1.54m、深さ0.20mである。

炉址は、長軸線方向の東端に1基と、遺構北側が突出してもう1基つくられていた。焼土が厚く堆積し、よく焼けて、堅く締まった炉床であった。

2基の炉址に挟まれた地点から、器形復元可能な条痕文土器の一括個体が出土した。

第7号炉穴 (第116図)

G・H4区、第6号炉穴の北側に隣接して位置する。平面の形状は楕円形で、規模は、長径1.86、短径0.93m、深さ0.21mである。

炉址は、長軸線方向の両端に各1基設けられていた。北側の炉址は、よく焼けて、堅く締まった炉床であったが、南側のものは焼土の堆積もうすく、あまり焼けていなかった。

第8号炉穴 (第116図)

G5区、第5号炉穴から南へ約16m離れて位置する。縄文時代の第1号住と重複しており、遺構東側を中心に壊されているが、平面の形状は楕円形になるものと思われる。規模は、推定長径1.40、推定短径1.20m、深さ0.08mである。

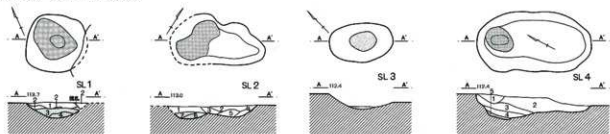
炉址は、遺構東側に焼土がわずかに残存しており、その痕跡を留めている。

第9号炉穴 (第116図)

I・J6区、第8号炉穴から南へ約3m離れて位置する。遺構北側が部分的に攪乱されているが、平面の形状は、楕円形をした大小の土壌が、2基連結したような不定形になるものと思われる。東側の楕円形の掘り込み部の規模は、長径1.16、推定短径0.98m、深さ0.14mである。

炉址は、長軸線方向の端部で2基検出された。一部

第115図 第1～5号炉穴



SL 1

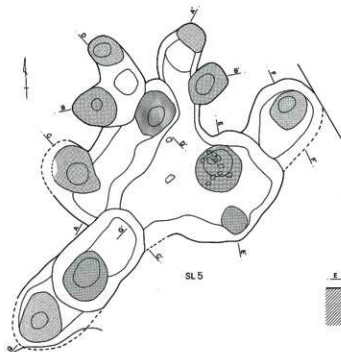
- 1 暗褐色土：焼土多、炭化物粒子少
- 2 赤褐色土：焼土主体、褐色土微
- 3 暗褐色土：焼土粒子少
- 4 赤褐色土：焼けたローム、堅緻

SL 2

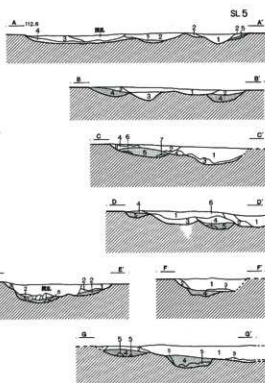
- 1 暗褐色土：ローム粒子多、焼土微
- 2 暗褐色土：ローム粒子多、焼土
- 3 暗褐色土：ローム土多、焼土微
- 4 暗黄褐色土：ローム土・焼土混合
- 5 黄褐色土：ローム土主体、やや粘性、やや堅緻
- 6 暗褐色土：焼けたローム、堅緻
- 7 暗褐色土：ローム粒子多

SL 4

- 1 暗褐色土：黒褐色土少、焼土・炭化物粒子微
- 2 黒褐色土：暗褐色土・ロームブロック少、焼土粒子・炭化物微
- 3 黒褐色土：炭化物粒子・焼土粒子多
- 4 暗赤褐色土：暗褐色土・焼土混合、炭化物粒子微
- 5 赤褐色土：（ローム地山）堅緻



SL 5



SL 5 (A-A')

- 1 暗褐色土：ローム土、焼土粒子
- 2 暗褐色土：焼土
- 3 暗褐色土：ローム土、焼土微
- 4 暗黄褐色土：ローム土、焼土粒子多
- 5 暗褐色土：焼土ブロック・粒子多

(B-B')

- 1 暗褐色土：ローム土・焼土粒子微
- 2 暗茶褐色土：ローム・褐色土主体、焼土多
- 3 黄褐色土：ローム土主体、粘性、やや堅緻
- 4 暗褐色土：焼土ブロック・粒子多

(C-C')

- 1 暗褐色土：ローム土、焼土粒子微、やや堅緻
- 2 暗褐色土：焼土粒子多、やや堅緻
- 3 黄褐色土：ローム土主体、やや粘性、やや堅緻
- 4 暗黄褐色土：ローム土・焼土微、やや堅緻
- 5 暗褐色土：焼土ブロック・粒子多
- 6 赤褐色土：焼けた焼土層、堅緻
- 7 暗褐色土：焼土ブロック・粒子多

(D-D')

- 1 暗褐色土：ローム土・焼土粒子微
- 2 暗褐色土：焼土少
- 3 黄褐色土：ローム土主体、粘性、やや堅緻
- 4 暗茶褐色土：ローム・褐色土主体、焼土多
- 5 暗褐色土：焼土粒子多
- 6 赤褐色土：焼土、堅緻

(E-E')

- 1 暗褐色土：ローム土・焼土微、やや粘性
- 2 暗茶褐色土：ローム・焼土混合、やや粘性
- 3 黄褐色土：ローム土主体、やや粘性
- 4 黄褐色土：ローム土、焼土少
- 5 暗褐色土：焼土粒子多
- 6 赤褐色土：焼土、堅緻
- 7 赤褐色土：焼土、堅緻

(F-F')

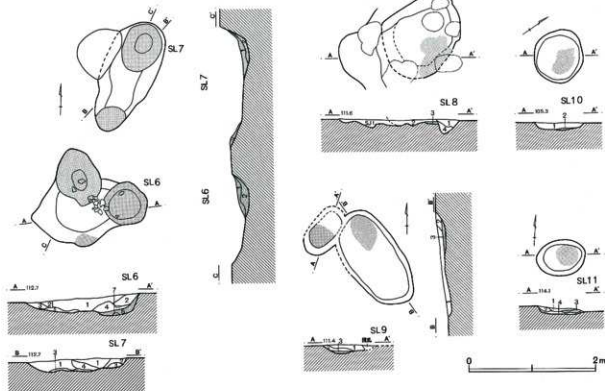
- 1 暗褐色土：ローム土・焼土粒子微、やや粘性、堅緻
- 2 黄褐色土：ローム土主体、やや粘性
- 3 暗茶褐色土：ローム土微、焼土多、やや粘性、堅緻

(G-G')

- 1 暗褐色土：ローム土・焼土微、やや粘性
- 2 暗褐色土：ローム土微、焼土、やや粘性
- 3 黄褐色土：ローム土主体、やや粘性
- 4 暗褐色土：焼土ブロック・粒子多
- 5 赤褐色土：焼けた焼土、堅緻

0 2m

第116図 第6～11号炉穴



SL 6 (A-A')

- 1 暗褐色土：焼土粒子微
- 2 暗褐色土：焼土粒子微、ローム
- 3 褐色土：ローム土
- 4 暗褐色土：ローム土多
- 5 黄褐色土：ローム土主体、やや粘性
- 6 暗褐色土：焼土粒子・ブロック多
- 7 赤褐色土：焼けたローム、やや堅緻

SL 7 (B-B')

- 1 暗褐色土：ローム粒子・焼土微
- 2 暗褐色土：ローム粒子
- 3 褐色土：ローム土主体、焼土微、やや堅緻
- 4 暗褐色土：焼土

SL 6-7 (C-C')

- 1 暗褐色土：焼土粒子・ブロック多
- 2 赤褐色土：堅緻

SL 8

- 1 暗褐色土：ローム・焼土粒子少
- 2 暗褐色土：ロームブロック、焼土粒子少
- 3 暗褐色土：焼土粒子多
- 4 暗褐色土：ロームブロック、焼土粒子微

SL 9 (A-A')

- 1 黒褐色土：焼土粒子微
- 2 暗褐色土：焼土粒子多、炭化物粒子微
- 3 暗褐色土

SL 9 (B-B')

- 1 暗褐色土：焼土粒子、炭化物粒子少
- 2 暗褐色土：炭化物粒子少
- 3 暗褐色土：焼土粒子微

SL 10

- 1 暗褐色土：粗砂多、焼土・炭化物粒子少、やや粘性・堅緻
- 2 暗赤褐色土：暗茶褐色土、やや粘性

SL 11

- 1 暗褐色土：ローム・焼土粒子少
- 2 暗褐色土：ローム土・暗褐色土混合
- 3 赤褐色土：赤色化ローム
- 4 黄褐色土：ローム層

攪乱されているが、よく焼けて、堅く締まった炉床であった。

第10号炉穴（第116図）

M8区、第9号炉穴から南へ約34m離れた、調査区南側の斜面に位置する。平面の形状は円形で、規模は、径0.86m、深さ0.12mである。

炉址は、中央からやや東寄りに焼土のうすい堆積が認められた。

第11号炉穴（第116図）

国道を挟んで西側の調査区の南端部、F00区に位置する。第1号炉穴から西へ約26m離れた地点である。平面の形状は楕円形で、規模は、長径0.90m、短径0.

55m、深さ0.09mである。

土壌の掘り込みは浅く、長軸方向東寄りに設けられたが址の焼土の堆積もうすい。

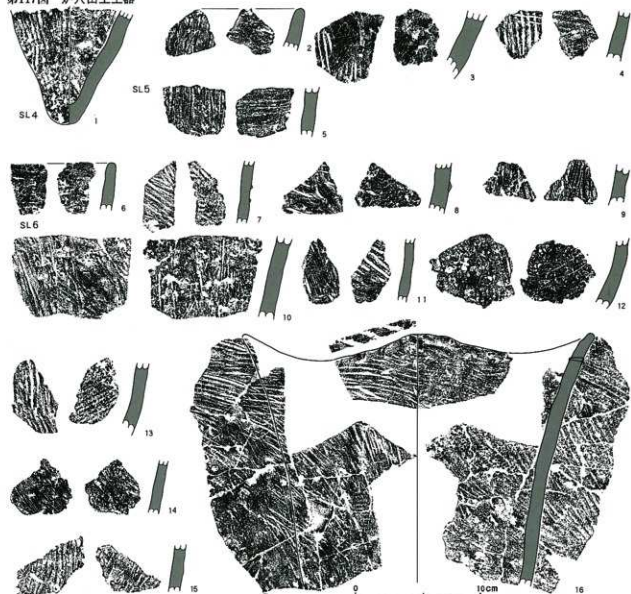
炉穴出土土器（第117図）

図示した土器は全て早期後半の条痕文系土器で、胎土に繊維と砂礫を含み、焼成は良好で、色調は褐色から暗褐色である。後で述べるグリッド出土土器の第Ⅲ群土器に該当する。

第4号炉穴出土土器（第117図1～4）

1は、先端が丸く、鋭角に立ち上がる底部の破片である。外面には縦位の条痕文が施され、内面には条痕が浅く残る。

第117図 炉穴出土土器



2は、口縁部の破片、丸棒状に成形され、外反する器形と思われる。口縁直下から細隆起線文を縦位に平行して施文する。

3、4は条底文が施されただけの胴部破片で、3は内面に擦痕が、4は浅い条底が残る。

第5号炉穴出土土器 (第117図5～9)

5は口縁部に近い部位の破片である。細隆起線文が縦位に平行して施されている。

6は口縁部破片である。口縁は丸棒状に成形され、器内外面に浅い条底文が残る。

7～9は胴部破片である。7は低い細隆起線文が2条平行して斜行する。8は細隆起線文による区画内に

集合沈線文を充墳施文する。

第6号炉穴出土土器 (第117図10～16)

16は、器形復元可能な一括個体である。推定口径は28.7cm、現存高は20cmである。胴部上半からやや外反して直線的に立ち上がり、口縁部は大きく開く器形で、4単位の波状口縁をもつ土器である。

口縁は角頭ぎみにつくられ、口唇には竹管状工具による刻目文が施される。条底文は、口縁部は口縁に沿って浅い角度で、胴部は角度をつけて、器内外面に施している。

10～15は、条底文あるいは擦痕文を施した胴部破片である。

(2) 住居跡

第1号住居跡 (第118・119図)

調査区中央の平坦部、やや南よりのH・I、5・6区で発見された。

平面の形状は方形で、規模は、長径7.11m、短径6.08m、深さ0.43mである。西壁の南寄り、第21号土壌と、また南西隅では第8号炉穴と重複しており、第21号土壌より古く、第8号炉穴より新しい。

また平面の形状や、壁溝、柱穴の配置などから、住居の建て替え・拡張が行なわれたものと思われる。

初期の住居は、内側を廻る壁溝の範囲で、規模は、長径5.50m、短径4.90m程度であったと推定される。

拡張は、南、西、北壁について行なわれ、長軸線の方角もやや南北に振れている。

床面は、中央部がやや低く、炉址は、東壁寄りで2箇所検出できた。地焼炉で、焼土の堆積は薄く、炉床もあまり焼けていない。主柱穴は、P1～P4であり、さらに壁柱穴が穿たれており、その他に床面には大小のピットが検出された。拡張後の壁溝は、西及び南壁の一部が確認できなかった。

出土遺物 (第120～122図)

遺物は、南西隅にややまとまった出土状況が認められたが、第121図19・20の条痕文系土器や21は、明らかに混在したもので、とくに21の一拵器は前期終末期のものであり、調査時に確認できなかったが、おそらくこの時期の土壌と重複していたものと思われる。

図示したその他の土器は、すべて黒浜式に属するものと考え。斜行縄文を施したものが主体であり、胎土には繊維を含み、総じて器内面は丁寧に整形され、手にしっとりとした感触を残すものが目立つ。

第120図1～18は、有文土器である。

1～5は、竹管状や半載竹管状工具を用いて、文様を描出したものである。

1は口縁部破片で、口縁は丸棒状に近い成形を行なうが、口唇内側には明瞭な稜が残る。口縁直下から半載竹管工具による結節沈線文、平行沈線文、そして竹管工具による円形刺突文を連続して施文する。

2は、1の同一個体と思われる。

3は口縁に近い部位の破片で、口縁部が外反する器形をとるものと思われる。集合沈線文と、結節沈線文を2段にわたって施文する。

4も、口縁部に近い部位の破片と思われる。集合沈線文を羽状に施す。

5は、縄文RLのうえに、半載竹管状工具による平行沈線文を、鋸歯状に施文する。

6は、細く鋭い沈線で、格子目文を描出する。地文は縄文Lである。

7は、櫛歯状工具により連続刺突文を施文する。有尾系土器である。

8～17は、器面に隆起線文を貼り付けた土器である。隆起線文には2種類あり、ひとつは、断面形が丸くなる隆起線文を、耳たぶ状に短く貼り付ける施文手法のものである。

これとは別に、断面形が三角形あるいはもっと偏平な隆起線文を、口縁に平行して過せたり、懸垂させるものがある。隆起線文は、両側を指で丁寧にナデ付けて器面に貼り付けられるが、全体的にみると凹凸が残って整形が不備であり、つくりの悪い土器のような印象を与える。

8、9は、同一個体である。口縁は内割ぎ状の成形が行なわれ、口唇から耳たぶ状の隆起線文を貼り付ける。下端は、口縁に沿って廻る断面形が三角形の隆起線文に接続する。口縁は緩い波状口縁形態となる可能性もある。貼付文の単位は、不明である。

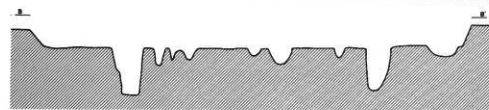
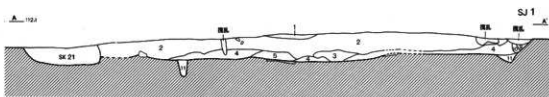
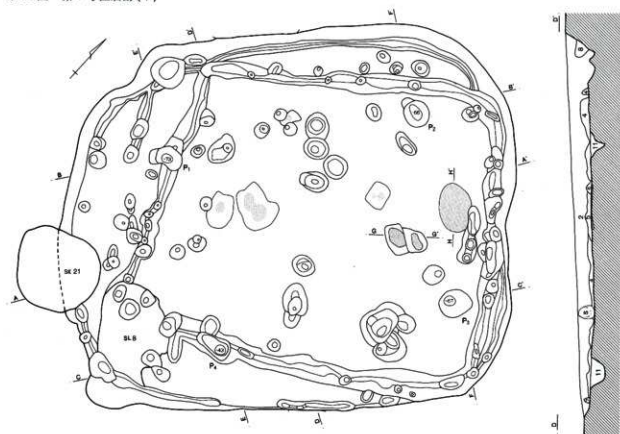
10～13も、口縁に近い部位の破片である。横位に平行する隆起線文の間を、短い間隔で隆起線文が連結する。丈の高い隆起線文で描出した窓枠状の文様は、立体的である。窓枠状文の下には縄文RLを施文する。

14も、口縁に近い部位の破片で、耳たぶ状の隆起線文を貼り付ける。

15～17は、口縁部下の破片である。15、16は、偏平で、丈の高い隆起線文が懸垂する。

18も横位の隆起線文が廻る土器であるが、その下に熱糸文の側面王斑を施す。花積下層式である。

第118图 第1号住居跡(1)



SJ 1 (G-G' · H-H')

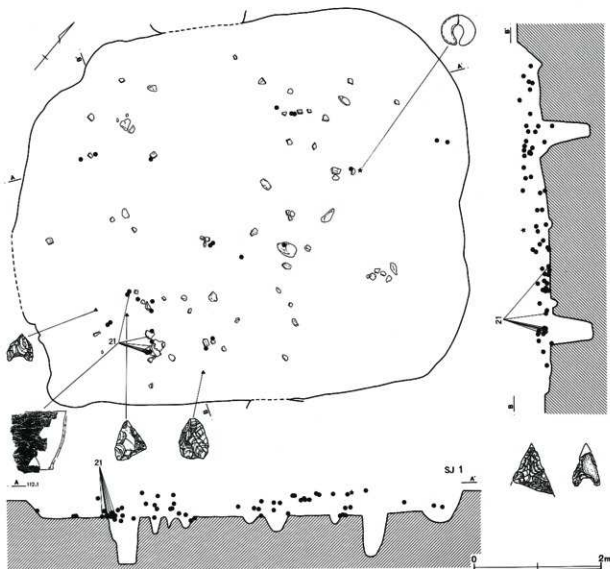
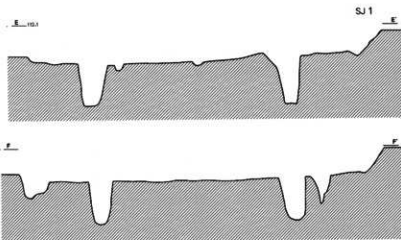
1 黒褐色土：焼土

0 2m

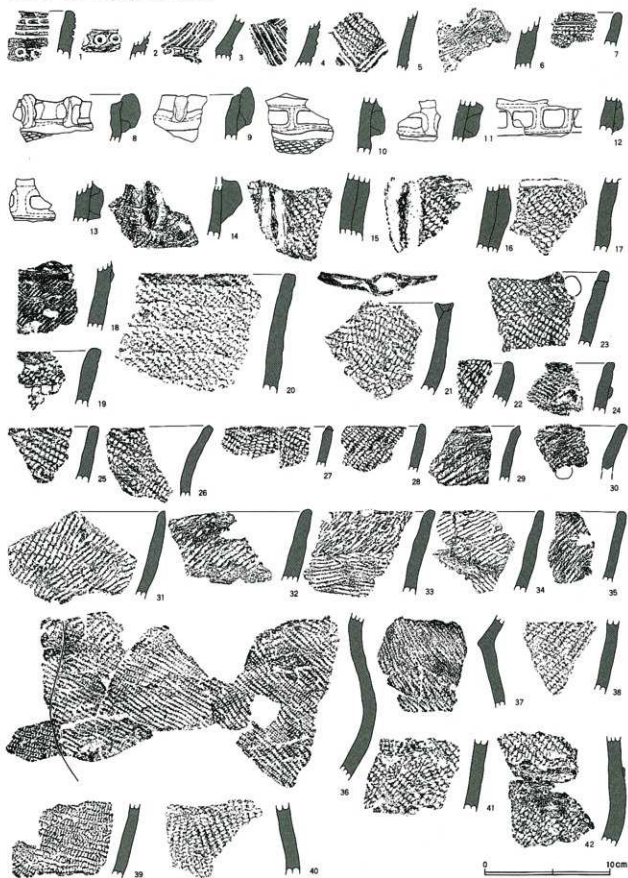
第119図 第1号住居跡(2)

SJ 1

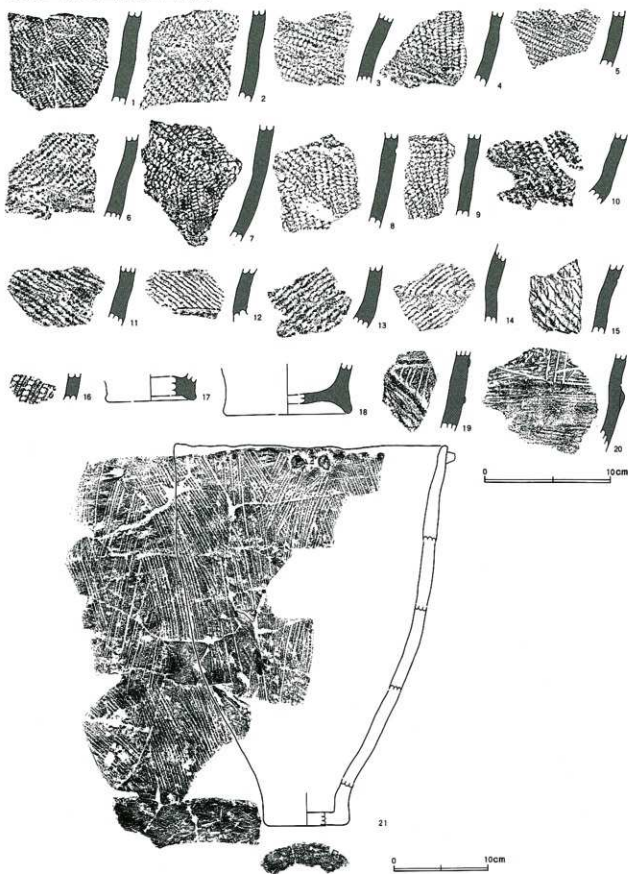
- 1 暗褐色土：焼土・ローム粒子少
- 2 黒褐色土：焼土・ローム粒子
- 3 黒褐色土：ローム粒子
- 4 暗褐色土：ロームブロック・粒子
- 5 黒褐色土：炉の覆土の一部？ローム・焼土小ブロック
- 6 黒褐色土：ローム小ブロック、やや堅微
- 7 暗褐色土：ロームブロック
- 8 暗褐色土：ローム粒子
- 9 黒褐色土：ローム土少
- 10 暗褐色土：第4層類似
- 11 暗褐色土



第120图 第1号住居跡出土土器(1)



第121図 第1号住居跡出土土器(2)



19~42、第121図1~16は、縄文施文の土器である。

19~35は、口縁部破片で、器形は直線的に立ち上がるものが多くを占めるが、屈曲して外反するもの(26、30)や、やや内湾するもの(21、31)もある。

口縁の成形は3種類が行なわれている。角頭状かそれに近いもの(19~21、23~26、34)、丸棒状のもの(22、27、28、30、32、33、35)、そして内削ぎ状のもの(29、31)である。また波状口縁形態のものには、21、23、31がある。

21は、波頂部が肥厚したように粘土紐が貼り付けられ、皿状に突起化する。

23は、波頂部直下に直径13mmの円孔をくわえる。

30は、補修孔のように思われる。

縄文は、単節、無節原体を斜行施文するものが主体であるが、19、20は、ループ文を多段に施文する。22は、口唇から縄文RLを施文する。33は、口縁直下の1帯とそれ以下で施文方向を変えている。34も、施文方向を変えることで、羽状縄文を表わす。

36~42、1~16は胴部破片である。

器形は、直線的に立ち上がるものの他に、胴部上半で括れあるいは屈曲して、下半が曲線的に張り出すもの(36、37、42)がある。10、13は、底部に近い部位の破片である。

36は、胴部上半の括れ部で、縄文の施文方向を変えて、羽状縄文を作出する。16の縄文原体は、正反の合である。

第121図17、18は、底部破片である。緩く屈曲して、張り出す器形で、上げ底となる。

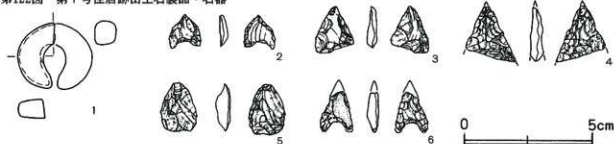
第121図19、20は、覆土中に混じっていた条痕文系土器である。19は、細隆起線文で幾何学的な文様を描出し、集合沈線文を充填施文する。20は、細隆起線文で、文様帯を区画し、沈線による幾何学的な文様内に刺突文を充填施文する。

第121図21も、混在した土器である。推定口径は20.8cm、高さ28cm、底部径6cmで、底部で屈曲して、胴部下半は曲線的に開き、胴部上半から口縁部は直線的に立ち上がる器形である。口縁は平縁で、先端が薄くなる丸棒状、成形した指先の痕跡を留めたように凹凸が残る。底部を穿孔する。

文様は、櫛歯状工具による条線文を、右下がり、左下がりに交互に繰り返す、器面全体に櫛歯状文様を描出する。口縁直下には2個一対の豆状の突起を、おそらく4単位で貼り付ける。

石器は、蛇紋岩製の扶状耳飾り1点(第122図1)と、石鎌4点(第122図2~5)が出土した。

第122図 第1号住居跡出土石器製品・石器



第27表 第1号住居跡出土石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
122図-1	扶状耳飾	(2.35)	0.95	0.68	(3.36)	蛇紋岩	
-2	石 鎌	1.3	1.34	0.29	0.47	チャート	
-3	石 鎌	1.76	1.56	0.45	1.01	チャート	
-4	石 鎌	(2.33)	(2.8)	(0.58)	(1.95)	チャート	
-5	石 鎌	2.2	1.41	0.57	1.29	黒曜石	
-6	石 鎌	(1.53)	1.31	0.38	(0.57)	チャート	

(3) 土壤

土壌は、34基発見された。このうち22基は、いわゆる落とし穴される形態のものである。落とし穴には、平面の形状が、長楕円形、楕円形、そしてほぼ円形のものがある。

長楕円形の場合は、壁が傾斜して立ち上がり、墳底の幅は極端に狭くなる。楕円形あるいは円形の場合は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、墳底は平坦で、数基の小ピットをとまなうものが多い。詳細については、一覧表に示し、ここでは落とし穴についての記述は省略する。

これとは別に、平面の形状が、円形基調の土壌が8基ある。

第15号土壤 (第123图)

調査区中央の平坦部、F4区に位置する。平面の形状は円形であるが、北側が浅く突出する。壁は強く傾斜して立ち上がり、墳底は平坦である。断面形は、鍋底状となる。

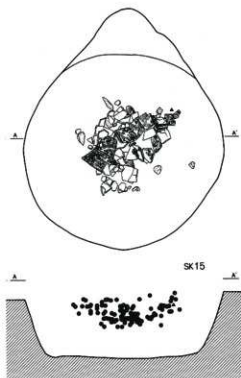
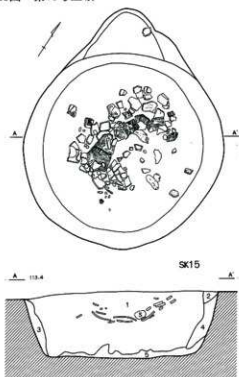
覆土上層から中層にかけて、推定復元が可能な一括
固体3点を含む前期終末の土器がまとまって出土し
た。

土器は、土壌中央部で潰れたような出土状況を示し、長さ10~20cmの襷が20点余り混じっていた。

第16号土墳 (第124図)

F4区、第15号土壌から東へ約6 m離れて位置する。平面の形状は円形で、墳底は起伏がある。

第123图 第15号土壤

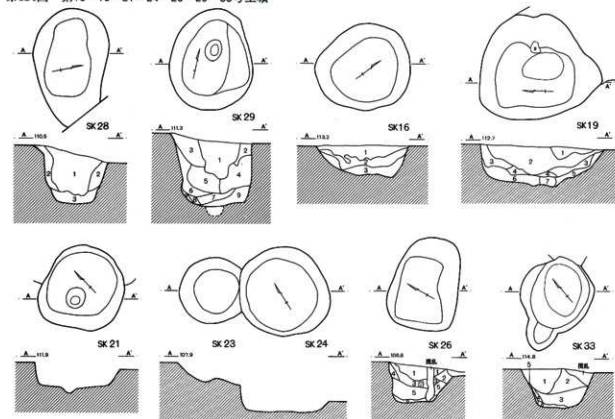


S K 15

- 1 暗褐色土：ローム粒子多、炭化物微、やや堅緻
- 2 暗黄褐色土：ローム・暗褐色土混合
- 3 暗褐色土：ロームブロック多、やや堅緻
- 4 暗褐色土：ローム粒子
- 5 暗褐色土：ローム土多、粘性



第124図 第16・19・21~24・26~29・33号土坑



- 5 褐色土：第4層類似
 6 暗褐色土：ローム土、堅緻
 7 暗褐色土：第6層類似、粘性、堅緻
 SK 26
 1 黒褐色土：ロームブロック、焼土粒子微、堅緻
 2 黒褐色土：ロームブロック、焼土粒子多、堅緻
 3 黒褐色土：ローム・焼土粒子少、堅緻
 4 黒褐色土：ロームブロック多、堅緻
 5 黒褐色土：堅緻
 6 暗褐色土：ローム小ブロック微、粘性、堅緻
 SK 28
 1 黒褐色土：やや堅緻
 2 暗褐色土：黒褐色土・ローム土混合、ロームブロック微、やや堅緻
 3 暗褐色土：ローム粒子微、やや堅緻
 SK 29
 1 暗褐色土：ブロック状
 2 暗黄褐色土：ローム土少
 3 暗褐色土：ローム土・焼土粒子微
 4 黄褐色土：ローム土
 5 暗褐色土：ロームブロック少
 6 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合
 7 暗褐色土：ローム粒子多
 8 黄褐色土：ローム土主体
 9 黄褐色土：やや堅緻
 SK 33
 1 暗褐色土：ローム土・褐色土混合、粘性、堅緻
 2 暗褐色土：ローム・焼土粒子多
 3 黒褐色土：ローム土、炭化物粒子微
 4 暗褐色土：ローム土・褐色土混合
 5 黄褐色土：ローム土主体
 6 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合

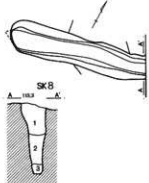
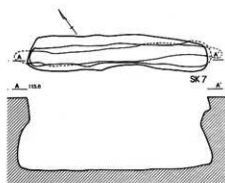
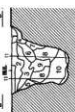
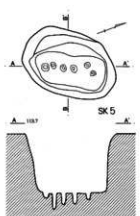
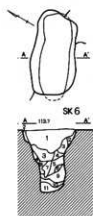
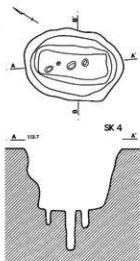
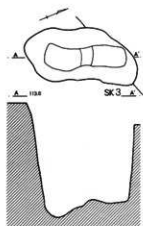
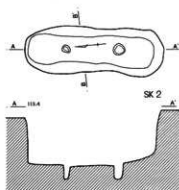
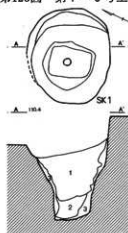
SK 16

- 1 暗褐色土：ローム粒子、ローム土
 2 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合
 3 黄褐色土：ローム土主体、褐色土

SK 19

- 1 黒褐色土：炭化物微
 2 暗褐色土：ローム粒子多
 3 暗褐色土：ローム粒子多
 4 褐色土：ローム土主体、暗褐色土微、粘性、堅緻

第125図 第1～8号土壇



SK 1

- 1 黒褐色土：ロームブロック微、やや堅緻
- 2 黒褐色土

- 3 暗黄褐色土：ローム土主体、やや堅緻

SK 2

- 1 暗褐色土：ローム粒子微、やや粘性

- 2 暗褐色土：ローム粒子微、ローム土少、やや粘性

- 3 暗褐色土：炭化物粒子、ローム土微、やや粘性

- 4 暗褐色土：ロームブロック、ローム土微、やや粘性

- 5 黄褐色土：ソフトローム土主体、ハードロームブロック、黒褐色土微

- 6 黒褐色土：ロームブロック微、やや粘性

- 7 暗褐色土：ロームブロック少、やや粘性

- 8 暗褐色土：ほぼ均質で、きめ細かい

SK 4

- 1 黒褐色土：焼土粒子微、ローム土

- 2 黒褐色土：焼土粒子微、ローム粒子多

- 3 暗褐色土：ローム土・褐色土混合

- 4 暗褐色土：第3層よりローム土多

- 5 黒褐色土：炭化物、ローム土微

- 6 黄褐色土：ローム土主体、褐色土微

- 7 黒褐色土：第5層よりローム土多

- 8 暗褐色土：ローム土少、炭化物粒子微

- 9 暗褐色土：ローム土・褐色土混合

- 10 暗褐色土：第9層より褐色土多

- 11 暗褐色土：ローム土主体

- 12 黄褐色土：ローム土主体

- 13 暗黄褐色土：第9層よりローム土多

SK 5

- 1 黄褐色土：ローム土・褐色土混合

- 2 暗褐色土：ローム土少、小石多

- 3 暗褐色土：炭化物粒子少

- 4 暗黄褐色土：褐色土多

- 5 暗黄褐色土：第1層類似

- 6 暗褐色土：ローム、炭化物粒子微

- 7 暗褐色土：第5層類似

- 8 暗褐色土

- 9 暗褐色土：ローム土

- 10 暗褐色土：炭化物粒子多、焼土粒子微

- 11 暗褐色土：第10層よりやや明、やや粘性、堅緻

SK 6

- 1 黒褐色土：焼土粒子微

- 2 暗褐色土：ローム土・褐色土混合

- 3 暗褐色土：焼土粒子微

- 4 暗褐色土：炭化物粒子

- 5 暗褐色土：ローム粒子多、ブロック微

- 6 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合

- 7 暗褐色土：第3層類似、炭化物粒子

- 8 暗褐色土

- 9 黒褐色土：ロームブロック少、やや粘性

- 10 ロームブロック

- 11 暗褐色土：炭化・赤色・ローム粒子

SK 8

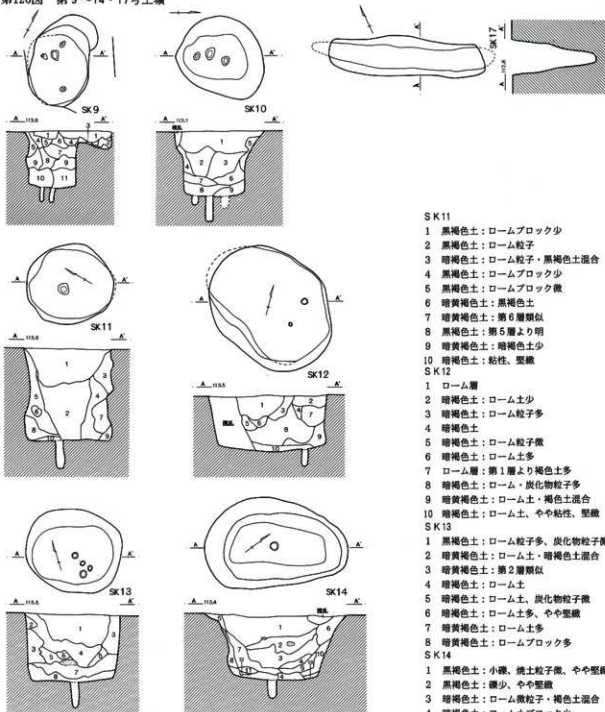
- 1 暗褐色土：黒色・焼土微粒子微、やや粘性、堅緻

- 2 黄褐色土：ローム土、やや粘性、堅緻

- 3 黒褐色土：焼土微粒子微、やや粘性、堅緻

0 2m

第126図 第9～14・17号土壤



SK 9

- 1 黒褐色土：ローム粒子微
- 2 暗褐色土：ローム土少
- 3 暗褐色土：ローム土・褐色土混合
- 4 黒褐色土：ローム粒子多、炭化物粒子少
- 5 黒褐色土：ローム土多
- 6 暗褐色土：ローム土
- 7 暗褐色土：ローム粒子
- 8 黒褐色土：ローム粒子微、炭化物粒子
- 9 黒褐色土：ローム粒子、ローム土多
- 10 黄褐色土：ローム土主体、褐色土、ローム土
- 11 黄褐色土：ローム土主体

SK 10

- 1 黒褐色土：ローム粒子少
- 2 黒褐色土：第1層よりローム粒子多
- 3 黒褐色土：第1層より焼土・ローム粒子やや多
- 4 黒褐色土：黒褐色土主体、ロームブロック
- 5 黒褐色土：第4層類似
- 6 暗褐色土：ローム粒子多
- 7 暗褐色土：第6層類似
- 8 暗黄褐色土：ソフトローム主体、黒褐色土微
- 9 暗褐色土：ロームブロック少

SK 11

- 1 黒褐色土：ロームブロック少
- 2 黒褐色土：ローム粒子
- 3 暗褐色土：ローム粒子・黒褐色土混合
- 4 黒褐色土：ロームブロック少
- 5 黒褐色土：ロームブロック微
- 6 暗黄褐色土：黒褐色土
- 7 暗黄褐色土：第6層類似
- 8 黒褐色土：第5層より明
- 9 暗黄褐色土：暗褐色土少
- 10 暗褐色土：粘性、堅緻

SK 12

- 1 ローム層
- 2 暗褐色土：ローム土少
- 3 暗褐色土：ローム粒子多
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土：ローム粒子微
- 6 暗褐色土：ローム土多
- 7 ローム層：第1層より褐色土多
- 8 暗褐色土：ローム・炭化物粒子多
- 9 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合
- 10 暗褐色土：ローム土、やや粘性、堅緻

SK 13

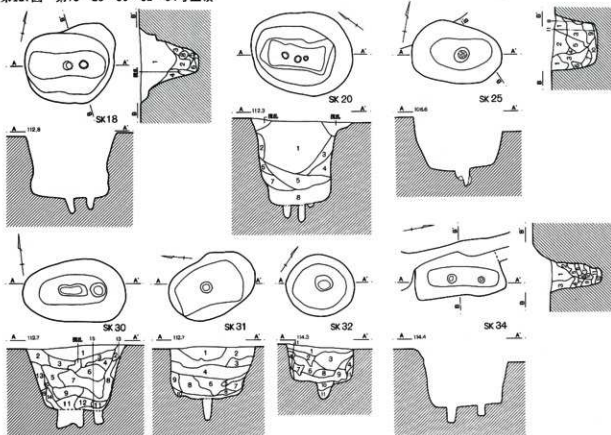
- 1 黒褐色土：ローム粒子多、炭化物粒子微
- 2 暗黄褐色土：ローム土・暗褐色土混合
- 3 暗黄褐色土：第2層類似
- 4 暗褐色土：ローム土
- 5 暗褐色土：ローム土、炭化物粒子微
- 6 暗褐色土：ローム土多、やや堅緻
- 7 暗黄褐色土：ローム土多
- 8 暗黄褐色土：ロームブロック多

SK 14

- 1 黒褐色土：小礫、焼土粒子微、やや堅緻
- 2 黒褐色土：礫少、やや堅緻
- 3 暗褐色土：ローム微粒子・褐色土混合
- 4 暗褐色土：ローム小ブロック少
- 5 暗褐色土：ローム土、やや堅緻
- 6 暗褐色土：第5層類似
- 7 暗褐色土：第3層よりローム小ブロック多
- 8 暗褐色土：ロームブロック
- 9 暗褐色土：ローム小ブロック
- 10 暗黄褐色土：ローム土主体、暗褐色土少
- 11 暗黄褐色土：ローム土主体、堅緻
- 12 暗褐色土：ローム小ブロック少
- 13 暗褐色土：第12層類似
- 14 暗褐色土：ローム小ブロック少、やや堅緻

0 2m

第127図 第18・25・30～32・34号土坑



SK 18

- 1 黒褐色土：炭化物粒子、ローム粒子多
- 2 暗褐色土：第1層よりローム粒子多
- 3 暗褐色土：第2層よりローム粒子多
- 4 暗褐色土：第3層類似
- 5 黄褐色土：ソフトローム主体、暗褐色土少
- 6 黄褐色土：第5層類似
- 7 暗褐色土：第3層類似
- 8 黒褐色土ブロック

SK 20

- 1 黒褐色土：ローム・焼土粒子微
- 2 黒褐色土：ロームブロック、ローム・焼土粒子
- 3 黒褐色土：ローム粒子多
- 4 暗黄褐色土：ローム土・暗褐色土混合
- 5 暗褐色土：ローム粒子
- 6 暗黄褐色土：ローム土・暗褐色土混合
- 7 暗褐色土：ローム粒子
- 8 黄褐色土：ローム土主体、暗褐色土、粘性

SK 25

- 1 暗褐色土：ローム粒子多、焼土粒子微、堅緻
- 2 黒褐色土：ローム粒子多、炭化物粒子微、堅緻
- 3 暗褐色土：第1層よりローム粒子多、堅緻
- 4 暗褐色土：第3層類似
- 5 暗褐色土：ローム粒子多、炭化物・焼土粒子少、堅緻
- 6 暗褐色土：ローム粒子多、やや堅緻
- 7 黒褐色土：ローム粒子多、堅緻
- 8 暗褐色土：ローム土少、やや堅緻
- 9 暗褐色土：ローム粒子多、堅緻
- 10 暗褐色土：第9層よりやや粘性
- 11 暗黄褐色土：ローム土多、やや粘性、堅緻

SK 30

- 1 暗褐色土：ローム粒子微
- 2 暗褐色土：第1層よりローム粒子多
- 3 暗褐色土：炭化物粒子微
- 4 暗褐色土：第3層類似
- 5 暗褐色土：ローム粒子少
- 6 暗褐色土：ローム粒子第5層より多
- 7 暗褐色土：ローム土多
- 8 暗褐色土：ローム粒子多
- 9 暗褐色土：第8層よりローム粒子少
- 10 暗褐色土：第5層類似
- 11 暗黄褐色土：ローム土多
- 12 暗黄褐色土：ローム土主体
- 13 黄褐色土：ローム土
- 14 黄褐色土：第13層より褐色土多
- 15 黒褐色土：ローム土少

SK 31

- 1 暗茶褐色土：ロームブロック少
- 2 暗褐色土：ロームブロック微
- 3 暗茶褐色土：ロームブロック
- 4 黒褐色土：ローム粒子少
- 5 暗茶褐色土：第3層に類似
- 6 暗褐色土：ローム粒子微
- 7 黒褐色土：ローム粒子少
- 8 暗茶褐色土：第3層に類似
- 9 暗茶褐色土：ローム土・黒褐色土混合
- 10 暗茶褐色土：第9層に類似

SK 32

- 1 暗褐色土：ローム粒子微
- 2 暗褐色土：炭化物粒子少
- 3 暗褐色土：ローム粒子多
- 4 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合
- 5 暗褐色土：第3層よりやや明
- 6 暗褐色土：ローム粒子
- 7 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合
- 8 暗褐色土：ローム粒子多、炭化物・焼土粒子少

SK 34

- 9 黒褐色土：ロームブロック多
- 10 暗黄褐色土：ローム土・褐色土混合
- 11 黄褐色土：ローム土主体
- 12 暗褐色土：ローム土多
- 1 暗褐色土：ローム土多
- 2 暗褐色土：ローム土
- 3 暗黄褐色土：ローム土多
- 4 暗褐色土：第2層よりローム土少
- 5 暗褐色土：ローム粒子多
- 6 暗褐色土：ローム土少
- 7 暗黄褐色土：ローム土多
- 8 暗褐色土：炭化物粒子微
- 9 暗褐色土：ローム土多
- 10 暗褐色土：第5層類似
- 11 暗褐色土：ローム粒子少
- 12 暗黄褐色土：ローム土多

0 2m

第19号土墳 (第124図)

G・H4区、第16号土墳から南約10m離れて位置する。平面の形状は、長軸線を南北方向にもつ、やや不正な楕円形で、壁は全体的に緩やかな傾斜で立ち上がる。墳底は起伏がある。

第21号土墳 (第124図)

I5・6区、第1号住を壊してつくられていた。平面の形状は円形で、断面形は鍋底形である。平坦な墳底にはビット状の浅い掘り込みがあった。

第23、24号土墳 (第124図)

K7区、調査区南側の斜面部に位置する。2基の土墳は重複しており、第24号土墳が新しい。第24号土墳

の平面の形状は円形で、断面形は鍋底形である。

第26号土墳 (第124図)

L6区、第24号土墳から南西へ約8m離れて位置する。平面の形状は、長軸線を東西方向にもつ方形で、西壁は強く、南・東壁は緩く傾斜して立ち上がり、墳底は平坦である。

第27号土墳 (第124図)

L7・8区、第26号土墳から東へ約10m離れて位置する。平面の形状は円形で、断面形は鍋底形である。墳底は中央が浅く掘り窪められていた。

覆土上層から、長さ10cm前後の多量の礫に混じって、前期終末の土器片がまとまって出土した。

第28表 縄文時代土墳一覧表

新番号	グリッド	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	備 考	旧番号
1	B1	円 形	1.50	1.33	1.05	N-73°-E	落 し 穴	68
2	C・D2	長 方 形	2.19	0.70	0.82	N-4°-E	落 し 穴	64
3	D3	楕 円 形	1.74	0.80	1.40	N-23°-E	落 し 穴	63
4	D3	楕 円 形	1.55	1.03	0.90	N-27°-W	落 し 穴	61
5	D・E3	楕 円 形	1.53	1.03	0.90	N-29°-E	落 し 穴	41
6	E3	楕 円 形	1.33	0.67	0.97	N-63°-E	落 し 穴	39
7	E3	長 方 形	2.83	0.55	1.13	N-53°-W	落 し 穴	36
8	E4	長 方 形	(2.22)	0.48	1.10	N-72°-E	落 し 穴	54
9	E4	楕 円 形	1.45	0.95	0.88	N-23°-W	落 し 穴	40
10	F3	円 形	1.42	1.20	1.02	N-13°-E	落 し 穴	31
11	F3	円 形	1.37	1.30	1.44	N-15°-W	落 し 穴	30
12	F4	楕 円 形	2.14	1.65	0.90	N-66°-W	落 し 穴	32
13	F4	円 形	1.50	1.30	1.05	N-74°-W	落 し 穴	25
14	F4	楕 円 形	2.28	1.42	0.98	N-37°-E	落 し 穴	26
15	F4	円 形	1.89	1.59	0.52	N-33°-W		23
16	F4	円 形	1.50	1.37	0.46	N-5°-W		22
17	G4	長 方 形	2.45	0.63	0.30	N-59°-W	落 し 穴	65
18	G5	円 形	1.41	1.10	0.97	N-78°-E	落 し 穴	16
19	G・H4	不 定 形	1.93	1.63	0.60	N-3°-E		14
20	H5	楕 円 形	1.65	1.30	1.32	N-26°-W	落 し 穴	9
21	I5・6	円 形	1.37	1.25	0.35	N-78°-E	SJ 1 内	8
22	K6	楕 円 形	1.88	1.24	0.33	N-60°-E	落 し 穴	3
23	K7	円 形	1.08	1.05	0.20	N-76°-E		5
24	K7	円 形	1.52	1.40	0.37	N-33°-W		4
25	K7	楕 円 形	1.45	0.92	0.70	N-88°-E	落 し 穴	42
26	L6	長 方 形	1.50	1.05	0.57	N-81°-E		1
27	L7・8	円 形	0.96	0.89	0.51	N-3°-E		13
28	C02	楕 円 形	1.90	1.15	0.79	N-74°-W		77
29	C02	楕 円 形	1.60	1.30	1.03	N-9°-W		79
30	C・D02	楕 円 形	1.63	0.95	1.00	N-84°-W	落 し 穴	74
31	D02	楕 円 形	1.42	0.93	0.82	N-30°-W	落 し 穴	76
32	E01・02	円 形	1.08	0.97	0.55	N-54°-E	落 し 穴	73
33	F01	円 形	1.13	1.10	0.60	N-20°-W		70
34	E・F01	長 方 形	1.45	0.68	0.78	N-10°-E	落 し 穴	75

第28号土壌 (第124図)

C02区、国道を挟んだ西側の調査区北斜面に位置する。平面の形状は、長軸線を東西方向にもつ楕円形で、断面形は鍋底形である。

第29号土壌 (第124図)

C02区、第28号土壌から西へ約2m離れて位置する。平面の形状は、長軸線を南北方向にもつ楕円形で、断面形は鍋底形である。墳底をビット状の浅く掘り窪めてあった。

第33号土壌 (第124図)

F01区、第28号土壌から南へ約30m離れた平坦部に位置する。平面の形状は、長軸線を東西方向にもつ楕円形で、西側が浅く突出する。断面形は鍋底形である。

(4) 土壌出土の遺物

図示した土器は、全て諸磯C式以降前期終末期の土器で、胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調は明褐色から茶褐色である。器内面は平滑に整形されるが、擦痕状の整形痕を残すものがある。また器面の風化が著しく、文様や器面の剥落したものもある。

後述するグリッド出土土器の第V群土器に該当する。

第7号土壌出土土器 (第128図1～3)

1～3は、深鉢形土器の胴部破片である。1・2は、櫛歯状工具により、条線文を弧状に施す。3は縄文Lを横位多段に施文する。

第11号土壌出土土器 (第128図4～12)

4は深鉢形土器の頸部、5は胴部上半の破片である。4は、半截竹管による集合沈線文を横位に施し、断面三角形の隆起線文が垂下する。5は、縦位の条線文上に豆状の貼付文を等間隔で貼り付ける。

6～11は、条線文のみの土器で、6・7は深鉢形土器の口縁部破片、他は胴部破片である。5・6の口縁は、内割ぎしたように先端が細くなる。口縁に沿って条線文が廻り、その下は鋸歯状に条線文を施文する。

8～10は鋸歯状に条線文を施す。11は、縄文L・Rの結束羽状縄文を施文する。

第12号土壌出土土器 (第128図13～27)

13～19は、深鉢形土器の口縁部破片で、20～27は胴部破片である。14は、複合化し、尖った口縁で、内側の肥厚部には断面三角形の細長い貼付文と、円形貼付文を交互に施文する。外面は斜行する条線文地上に、断面三角形の隆起線文が垂下する。

15は、角頭状の口縁で、矢羽状の集合沈線文を地文とし、断面三角形の細長い貼付文と、対をなす円形貼付文を施す。

13は、直線的に外反する器形の土器で、口縁は先細りした丸棒状である。条線文が、口縁に沿って廻り、その下に鋸歯状の文様を描出する。

16は、丸棒状の口縁で、口縁直下から条線文により鋸歯状文を描出する。

17は、内割ぎ気味の口縁で、へら状工具による集合沈線文が口縁に沿って廻り、その下には集合沈線文が斜行する。

18は内割ぎ気味の口縁で、外反してやや肥厚する。細く浅い沈線文が2条口縁に沿って廻り、さらに斜行する平行沈線文を施文する。

19は、無文土器の口縁部破片で、口縁は内割ぎ状である。器外面に整形須か明瞭に残る。

20は、地文の条線文上に、複数条の結節浮線文を鋸歯状に施す。

21は、鋸歯状に施した条線文を地文とし、小型の貼付文を点々と貼り付け、さらに半截竹管による押し潰すような刺突文を加える。

22～25は、条線文のみを施したものである。

26・27は、縄文L・Rの結束羽状縄文を施文する。

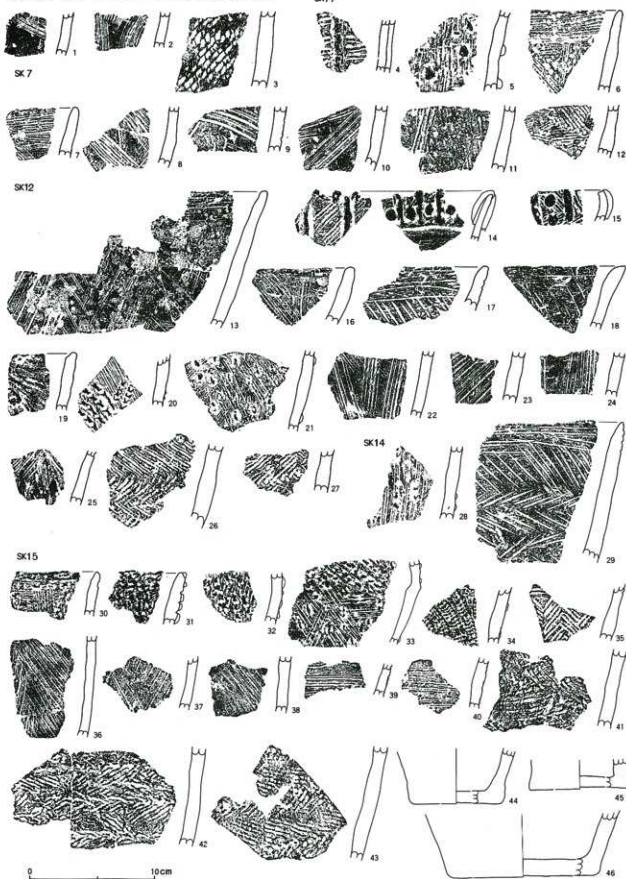
第14号土壌出土土器 (第128図28・29)

28は、地文の条線文上に、刺突を加えた小型の貼付文を施す。

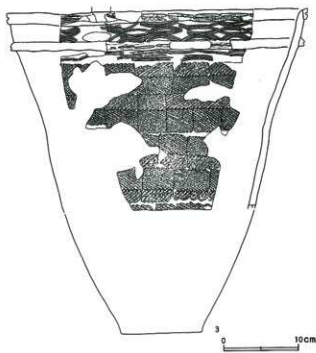
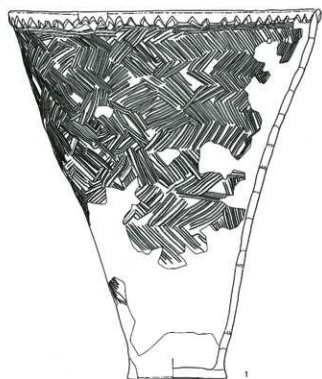
29は、直線的に外反する器形が考えられ、内割ぎした口縁形態である。へら状工具による細く鋭い沈線文で、口縁に沿って複数条の平行沈線文を描出し、矢羽状文を多段に施文する。

第15号土壌出土土器 (第128図30～46、第129図)

第128图 第7·11·12·14·15号土坑出土土器

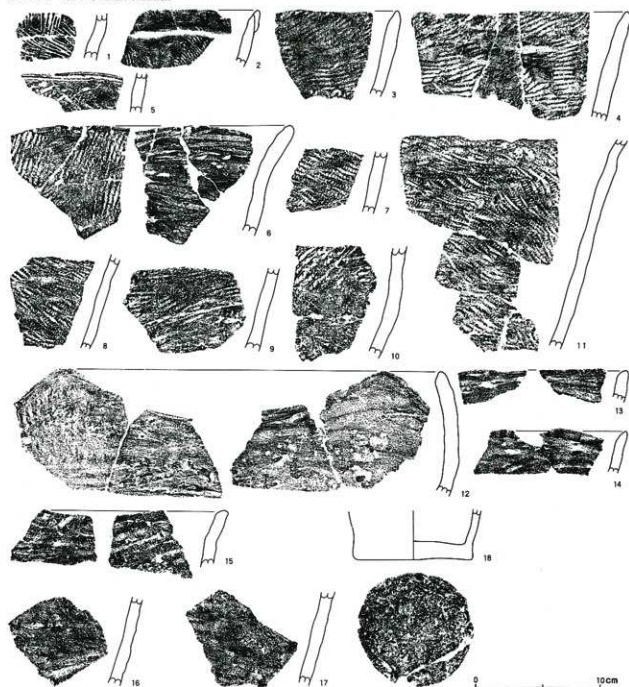


第129図 第15号土壇出土土器



0 10cm

第130図 第27号土壌出土土器



30・31は、尖った口縁の口唇上と、その直下に結節浮線文を施し、そこから30は斜めに、31は垂直に、結節浮線文を複数条貼り付ける。地文には櫛歯状工具による条線文を施文する。

32・33は口縁に近い部位の破片で、33は口縁部が内湾する器形である。複数条の結節浮線文が斜行し、33の胴部には、刺突を加えた小型の貼付文を、器面に埋めるように施す。

34の結節浮線文は、細い粘土紐に、粘土紐より幅の狭い半載竹管を使って、細かな結節を施している。条線文の地文上に2条1単位で渦巻文を描出する。

35は、半載竹管を使って、横位に区画する沈線文と、集合沈線文による鋸歯状文を描出する。

36~40は、櫛歯状工具により条線文を施した土器で、36・37は胴部に大きな鋸歯状文様を描出し、39・40は数段にわたって横走する。

41~43は結束羽状縄文を施した土器で、42は原体の結節が「S」字状に認められる。

第129図1は、口縁から底部まで、器形復元可能な一括固体である。口径40.2cm、器高48.4cm、底径13.0cmを測る大型の深鉢形土器で、全体的にやや重みがある。器形は、直線的に外反するラッパ状で、底部が張り出している。胎土には、砂粒と小礫を多く含み、焼成は良好である。

口縁は、内削ぎしたように鋭角で、複合口縁である。肥厚部に三角印刻文を連続して加え、鋸歯状文を描出する。

半載竹管状工具による2条1単位、あるいは工具を組み合わせて3条1単位の平行沈線文を施文する。まず、複合口縁直下と胴部中位に、器面の分割を意図した横位の施文を行なうが、胴部中位のものは、部分的で、途切れている。

平行沈線文は、羽状文様を表現するように施すが、施文順位や、文様割付に規則性が認められず、菱形や三角形の乱れた文様となる。

口縁部下には一対の穿孔が加えられているが、これが単位をもつものなのか不明である。

器内面には輪積み痕と横位の整形痕を明瞭に留める。

2も器形復元可能な一括個体で、推定口径32.2cm、残存高40cmである。器形は、胴部上半で張り、口縁部が内傾する椀形の深鉢形土器と推定される。口縁は、丸棒状に整形する。胎土には小礫が目立ち、焼成は良好であるが、器外面の剝落が顕著である。

半載竹管による平行沈線文を、口縁直下から横位に4段にわたって施し、口縁部文様帯を含め、器面を4分割する。口縁部文様帯には、平行沈線文による連弧状の重層文を対向して施文する。

胴部3段の文様帯には、やはり平行沈線文で鋸歯状文を描出する。また文様を施文した残りの、半弧・菱形・三角形の空間に印刻を加えるが、胴下半では印刻しない箇所もある。文様帯を区画する平行沈線文の要所には2個一対の凹形貼付文が施され、口縁直下の半

弧状の印刻部には一対の穿孔がある。

器内面の整形は、口縁部の部位は横方向、胴部は縦方向に行なわれている。

3は、口縁部から胴部上半の大型破片で、推定口径は40cmである。器形は、胴部上半が緩く括れ、口縁部は外反する。口縁は、内削ぎしたように鋭角である。

胎土には、砂粒を多く含み、焼成は良好であるが、ザラつきの残る器面である。

断面角形の隆帯が口縁部文様帯を区画し、隆帯上には、半載竹管の凸面による短沈線文を連続して施す。

口縁部区画内には、半載竹管による平行沈線文で、弧線状文を重層して施すため、文様の中位には凸レンズ状の文様が連なる。そして隆帯直下の区画外にも残存するように平行沈線文を施文する。

胴部には、縄文L・Rの結束羽状縄文を横位に施文し、部分的に原体末端の結節が「S」字状に現れる。

また口縁部には把手が付いていたと思われ、文様の途切れる箇所があり、器面に剝脱痕が残っている。

第27号土壌出土土器（第130図）

1は条線文を縦位・斜位に施文する。

5は半載竹管による平行沈線文が横走する。地文の縄文原体は不明瞭である。

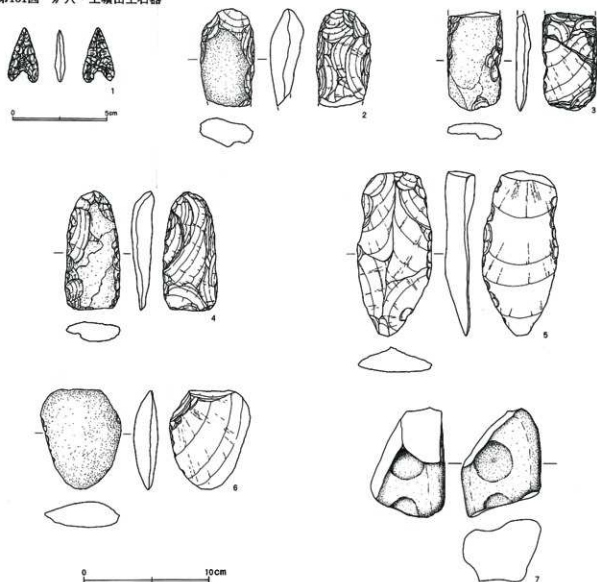
2~4・6~11は、縄文のみの土器である。2~4・6は、深鉢形土器の口縁部破片、他は胴部破片である。口縁の成形は、2~4が内削ぎ状で、6は丸棒状である。2は、複合口縁の土器で、複合部にも縄文Rを施文する。3は風化が著しいが、おそらく縄文L、4・6も縄文Lで、6の内面は、へら状工具による整形痕を明瞭に残す。

7・8・11は同一個体と思われる。縄文LRを施文する。9・10は縄文Lを施文する。

12~17は、無文土器で、12~15は口縁部破片、16・17は胴部破片である。12は、大波状縁の土器で、口縁部は内湾する。口縁は内削ぎ状で鋭角である。器内外面に整形痕が残る。15も波状縁の土器で、12・13もその可能性がある。口縁の成形は全て鋭角である。

16は底部破片、緩く屈曲して立ち上がる。

第131図 炉穴・土壌出土石器



石器 (第131図)

した。詳細は観察表に示す。

炉穴・土壌から、石鏃、打製石斧、磨石などが出土

第29表 炉穴・土壌出土石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
131図-1	石鏃	2.14	1.21	0.37	0.67	チャート	SL4
-2	打製石斧	(7.9)	4.23	2.45	(92.0)	砂岩	SK11
-3	打製石斧	(7.8)	3.4	1.15	(50.0)	砂岩	SK12
-4	打製石斧	9.4	4.3	1.42	77.0	ホルンフェルス	SK12
-5	剥片石器	13.0	6.0	2.39	156.0	ホルンフェルス	SK15
-6	磨石	7.9	6.5	1.82	94.0	砂岩	SK15
-7	磨・凹石	(6.92)	(6.26)	(5.74)	(298.0)	砂岩	SK15

(4) グリッド出土の遺物

土 器

グリッドからは、早期から、前期、中期、後期までの土器が出土したが、出土量からみて前期の土器が主体である。以下、第Ⅰ～Ⅴ群土器に分けて説明する。

第Ⅰ群土器 (第132図)

早期前半の押型文土器である。押型文の種類などにより第1～5類に分類できる。

第1類 (1～21)

山形押型文土器である。山形文はいずれも波長が小さい小型山形文である。

2単位の4条が主体と捉えられる。波長は、10～20mmであり、軸棒の直径は3.2～6.7mmとなる。原体幅は10～17mmである。

文様構成は、口縁部に横位施文、以下縦位に密接施文する横・縦密接施文が主体である。

第2類 (22～43)

楕円押型文土器である。22～28は口縁部破片。楕円文は全体的に小粒の楕円文である。

2単位2列が主体と捉えられる。波長は12～16mmであり、軸棒の直径は3.8～5.1mmとなる。原体幅は10～13mmが確認できた。

文様構成は、横・縦密接施文が中心である。

第3類 (44～46)

格子目押型文土器である。3点とも胴部破片で、44と45は同一個体である。44は波長14mm、軸棒の直径は4.5mmとなる。原体幅は14mmである。

文様構成は、多段の横位帯状構成と考えられる。胎土に繊維を若干含むと思われ、1、2類とはやや異質な感じである。

第4類 (47)

楕円文と格子目文の併施文土器である。楕円文はやや大粒である。文様構成は横位多段と考えられる。器厚は7mmである。

第5類 (48)

縄文を施文する口縁部破片である。口唇部は角頭状で、若干内傾する。原体LRの縄文を横位に施文する。

器厚は5mmと薄手で、堅緻な土器である。押型文土器に伴出する縄文土器と考えられる。

以上の第Ⅰ群土器は、横・縦の異方向密接構成で、原体が細く短い山形押型文、楕円押型文を主体とする時間幅がない土器群として捉えられる。

第Ⅱ群土器 (第133、134図)

早期前半の貝殻沈線文系土器である。

第1類 (第133図1・3・5・7)

細沈線文により幾何学文を描く土器である。

1は、内削ぎ状の口唇部をもつ口縁部破片である。口唇部の口端には小さい刻みが通る。格子目文、三角文を配置する。格子目文の縦位線は口唇部にまで及び、三角文内は格子目文を充填する。器厚は6mmとやや薄手である。

3は、口唇部が先細状になる口縁部破片である。口唇部には刻みを施す。文様は横位に細沈線文を地文状に廻らした上に、三角形の幾何学文を重ねて粗い格子目文を描く。

5は、口縁部近くの破片で、器面を内外面とも擦痕状に整形している。器厚は7mmである。

7は、縦位の沈線文間に斜位の沈線文を充填する。

第2類 (第133図4・6)

地文の貝殻条痕文の上に、細沈線文により幾何学文を描く土器である。貝殻条痕文を横位に施文し、沈線文と類似する文様効果を出している。

4は、内削ぎ状の口唇部で、刻みをもつ。貝殻条痕文を横位に、細沈線文を縦位に描く。器厚は8mmと厚手である。

6は貝殻条痕文を横位に細沈線文を縦位に描く。

第3類 (第133図2・8～23)

貝殻条痕文の土器である。

2は、内削ぎ状の口唇部をもつ口縁部破片である。口端に刻みをもつ。内面は口唇部付近に貝殻条痕文の残存が見られる以外は、擦痕状に丁寧に整形する。

8～23は胴部破片である。8～11は貝殻条痕文により格子目文を描く。内面は擦痕状に整形され、貝殻条痕文はほとんどみられない。

第4類 (第133図24)

太沈線文の土器である。胴部下半の破片である。

以上第1～4類は胎土に若干の繊維を含み、整形が類似し、三戸式に比定できる土器である。

第5類 (第134図1、133図25～27)

田戸下層式に比定できる土器である。

第134図1は、K8区からまとまって出土し、ある程度器形の推定が可能である。平縁の深鉢形土器で、厚みのある底部から曲線的に開き、口縁部直下で弱く括れ、口縁の外反する器形である。底部先端はかなり摩滅している。推定口径は29cm、推定器高は41cmである。

胎土には砂粒を含み、繊維は混在しない。焼成は良好で、底部の無文部はよく磨かれている。

口縁は角頭状で、僅かに肥厚する。肥厚部は、口縁に沿って廻る2条の平行沈線文により帯状に区切られ、口縁直下から、細く鋭い沈線による斜めの刻目文、半載竹管の凸面による連続爪形文、そしてまた刻目文の順に施文する。

肥厚部以下は、器面を横位に4分割して文様帯としている。文様帯を区画するのは、2条の平行沈線文間に施した連続爪形文と刻目文である。

第1帯は、半載竹管の凸面による集合沈線文が斜行して、空間を埋め、鋸歯状文を演出する。

第2帯は、平行沈線文で器面を埋める。半載竹管の凹面と凸面を使い分け、沈線の太さを変えている。また途中で沈線の施文を一旦止め、再度引き出す描出手法を行なっている。

第3帯は、楕円形の重畳文を6単位に施文し、空間は爪形文と刻目文で埋められている。

第4帯は、第2帯と同様の平行沈線文を施文する。

また、器内面のナデ整形は、口縁から第1帯の部位まで横方向、それ以下では縦方向に行なっている。

第133図25は、太沈線文と細沈線文の胴部破片である。

27は、細沈線文間に貝殻腹縁文を充填する土器である。胎土に若干の繊維を含む。

26は、細沈線文、連続刺突文と縄文を施文する。胎

土、色調の類似から本群に含めたが、時期等不明な土器である。

第III群土器 (第135図)

早期後半の条痕文系土器を一括する。

第1類 (第135図1～15)

口縁部に文様帯を構成し、細隆起線文や沈線文で文様を描出する土器である。a、b種は野島式に、c種は鶴ヶ島古式に比定されよう。

a種 (1・2) 非常に細い断面三角形の細隆起線文を等間隔に平行して施文し、空間を充填する土器である。

1の口縁部破片は、口唇上に刻目文を施す。

b種 (3～14) 2条の平行する細隆起線文で、曲線的あるいは幾何学的な文様を描出し、さらに区画した空間を集合沈線文で充填する土器である。

c種 (15) 太い沈線文で区画文様を描出し、空間を刺突文で埋める土器である。

第2類 (第135図16～34)

無文土器で、器内外面に条痕文や擦痕文を施す土器である。

第6号炉穴出土土器 (第117図16) のように外反する深鉢形の器形である。口縁部破片をa種、胴部破片をb種、底部破片をc種とする。

a種 (16～18) 16は隆帯を口縁に沿って貼り付けたような複合口縁である。17・18の口縁は角頭状である。いずれも直線的に開く器形である。

b種 (19～32) 条痕文と、それを磨り消した擦痕文を残す土器がある。

c種 (33・34) 33は、先端部が平らで、鋭角に開く器形である。34は平底になるものと思われる。

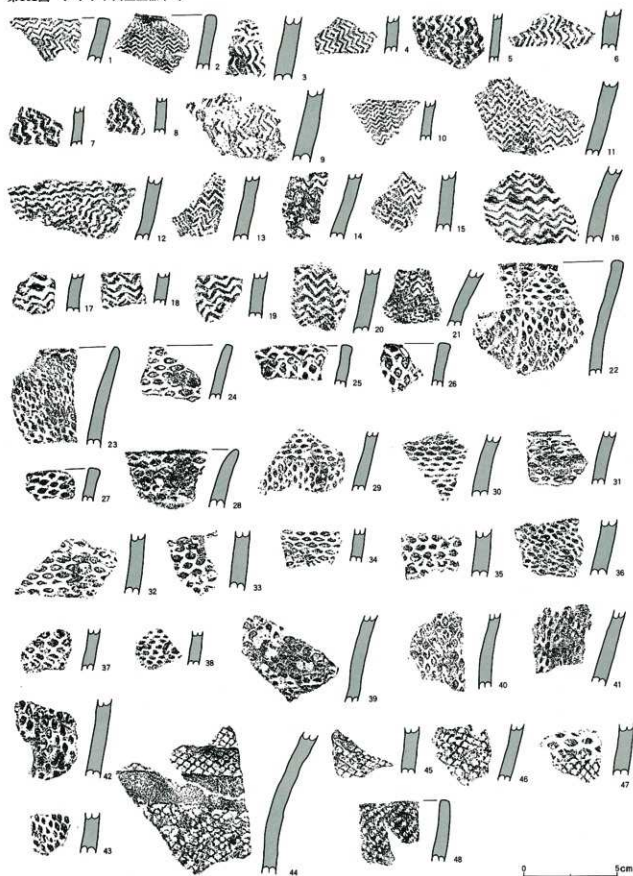
第IV群土器 (第136図、第137図1～11)

前期の繊維土器を一括するが、既に述べたとおり、黒浜式期の第1号住居跡が検出されており、黒浜式が主体である。

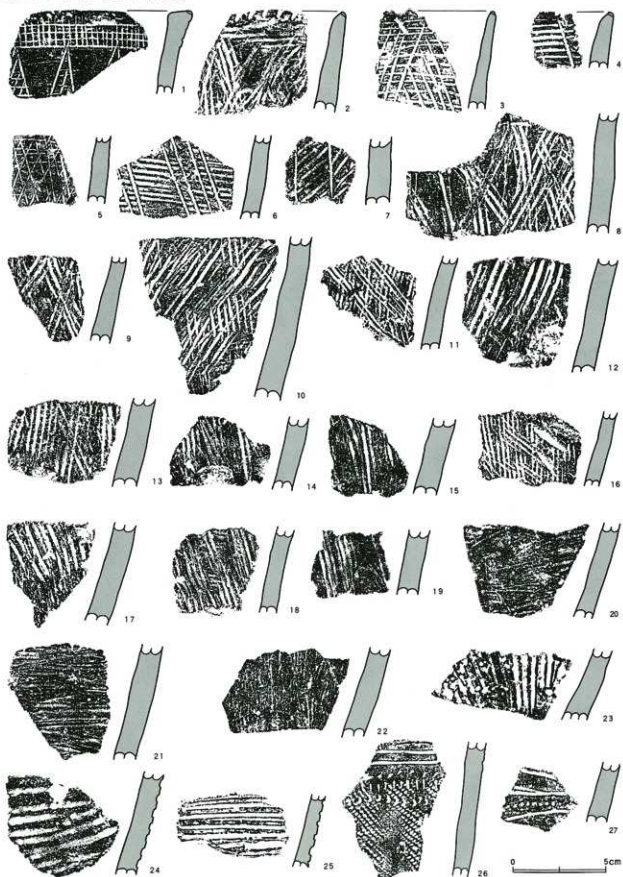
第1類 (第136図1)

口縁に近い部位の破片である。半載竹管による平行沈線文で直・曲線的な文様を描出する。関山式に比定

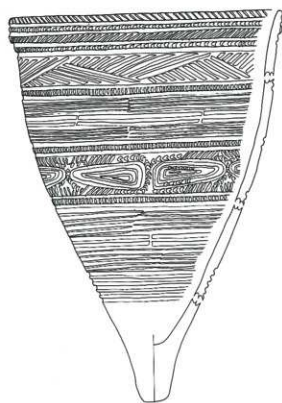
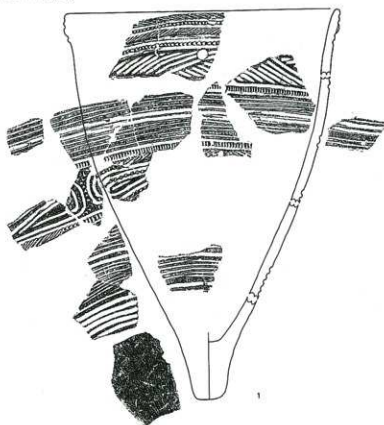
第132図 グリッド出土土器(1)



第133図 グリッド出土土器(2)

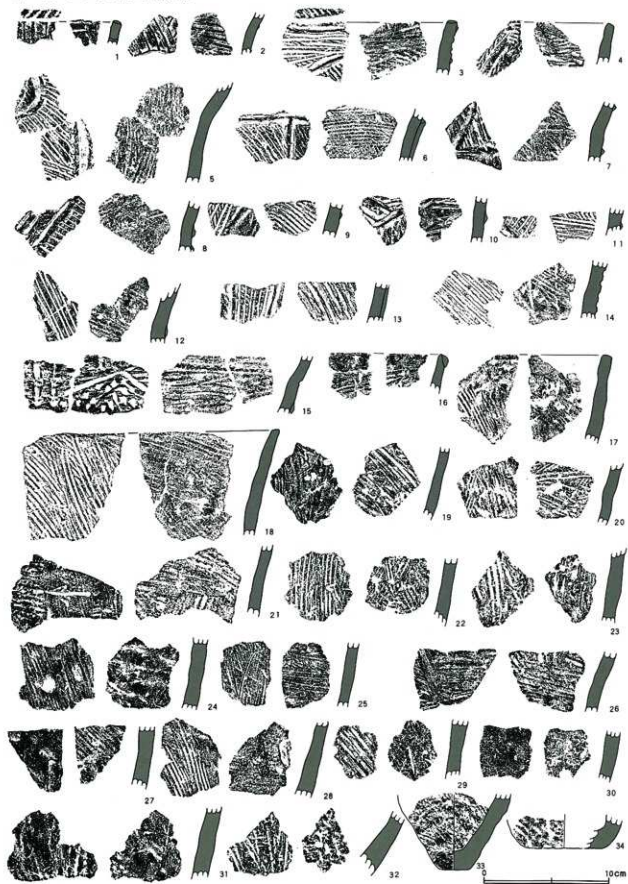


第134図 グリッド出土土器(3)



0 100cm

第135図 グリッド出土土器(4)



できようか。

第2類 (第136図2～13)

黒浜式段階の有文土器を一括する。

a種 (2・3) 半載竹管による平行沈線文で文様を描出する土器である。

2は口縁直下に弧状の文様が描かれ、3は横走する平行沈線文による区画内に、沈線文が斜行する。地文は縄文LRである。

b種 (4・5) 半載竹管により集合沈線文を施文する土器である。

4は、集合沈線文が斜行し、その下に平行沈線文間を埋める連続爪形文を施文する。5は、集合沈線文を羽状に施文する。

c種 (6) 横走する隆帯に沿って、竹管による連続刺突文を加えた土器である。

d種 (7～9) 平行沈線文の間に連続する刺突文や、爪形文を加えた土器である。

7は、斜行する平行沈線文間に連続刺突文を施す。さらに刺突文は、単独で曲線的に垂下している。8は、3単位の山形平行沈線文間に連続爪形文を施文し、その下にも3単位の爪形文で渦巻文を描出する。9は、幅広の平行沈線文間に幅広の連続爪形文を施し、菱形の文様を描出する。

e種 (10～13) 第1号住居跡からまとまって出土した (第120図8～17)、断面三角形の特徴的な隆起線文を貼り付けた土器である。

10は、波状縁の口縁部破片で、角頭状の口縁に沿って隆起線文を貼り付け、波頂部からも隆起線文が垂下する。地文は縄文LRである。13は、口縁上に隆起線文を貼り付ける。

第3類 (第136図14～48、第137図1～11)

縄文のみの土器を一括する。

単節斜行縄文の土器が主体であり、深鉢形の口縁部破片をa種、胴部破片をb種、底部破片をc種とする。

a種 (14～27) 平縁で、直線的に開く器形が考えられる。口縁は角頭状 (14・15・19・21・24・26) と、丸棒状 (16～18・20・23・25・27) に成形したものがある。

また14～19・21～23・25・27は、口縁直下を幅狭の無文帯とし、縄文を施文する。

14は、縄文LRと縄文Lを重複して施文する。27は、縄文LとRを使って羽状縄文を作出する。

b種 (28～48、第137図1～6) 器形は、直線的に立ち上がるものと、緩く括れて胴部の張るものがある。単節斜行縄文の他に、羽状縄文 (1～3) や、無節 (4～6) の斜行縄文がある。

c種 (第137図7～11) 底部は上げ底の形態をとおり、とくに7は極端な上げ底となる。8・10は、底部部にまで縄文を施文する。

第V群土器 (第137図12～51、第138図、第139図1～16)

前期後半の土器を一括する。第1類は、諸磯a、b式に、第2～9類は、諸磯c式から終末段階に比定される土器である。

第1類 (第137図12～29)

a種 (12～14) 12～14は同一個体で、外反する口縁部から、頸部で括れ、胴部の張る器形である。半載竹管による平行沈線文を、器面全体に横・縦・斜位に施文し、縦位の平行沈線文上には円形刺突文を連続して加える。地文は縄文LRである。

b種 (15・16) 半載竹管による平行沈線文間に連続爪形文を加え、横走あるいは弧線状の文様を描出する土器である。胎土中に繊維は混在しない。

c種 (17) 刻みを加えた浮線文を貼付する土器である。地文は確認できない。

d種 (18～24) 半載竹管による平行沈線文が間隔をもって横走する土器である。

18は、平行沈線文間に波状文を描出する。地文は縄文LRである。19～24は18より幅狭の平行沈線文を使っている。地文に斜行縄文を施文するが、原体は不明瞭である。

e種 (24～29) 半載竹管状のものを束ねた施文具を使い、集合化した平行沈線文を描出し、それを無文地の胴部に間をとって施文した土器である。

27は、偏平な隆帯が横走する。